

北辰會雜誌

第八十四號

第四高等學校北辰會雜誌
大正八年三月三十日發行
第八十四號

第四高等學校

北辰會雜誌

第八拾四號

目次

芭蕉遷化と支考……………各務虎雄……………

動物學者……………藤野靖……………

青と銀との嘆……………北村喜八……………

北辰會各部々報……………

芭蕉遷化と支考

〔支考傳の一部〕

各務虎雄

近松門左衛門と共に元祿の双美として並び稱せられた松尾芭蕉が、その旅行に於て、後に蕉門の股肱として得たる門弟には、山本荷兮名古屋桑名町、南杜國尾州、岡田野水尾州、谷木因濃州大垣、近藤如行濃州大垣、宮崎荆口濃州大垣、釋千那江州堅田、江左尙白、智月尼江州大津、相良等躬、八十村路通濃州花、圖司呂丸出羽羽黒、渡會園女勢州松阪、等その他一々擧ぐるに違なき程多くあつたが、芭蕉の歿後に、俳諧に於て美濃派（又獅子門派）を建て、蕉風が今日に於て猶美濃の一勢力をなせる基を開いた東花坊各務支考濃州山縣は、亦芭蕉が旅行中に得たる一門弟に數へられる者である。

世人或は支考を以て、所謂蕉門十哲の一人として、榎本其角江戶、服部嵐雪淡州小榎並村、向井去來肥前、内藤丈艸尾州、森川許六江州彦根、志多野坡越前福井、越智越人名古屋、立花北枝加州金澤、杉山杉風江戶、或は越人を除いて、天野桃隣伊賀上野、河會會良信州諏訪、又は濱田洒堂を加へる者があり、その他、芭蕉が生前中に、其角、嵐雪、去來、丈艸、野坡に支考を加へて、蕉門の六大弟子とし、「ほとけたる事支考に及ばず」と言つたといふ者もあるが、共に今の處確乎たる根據がない。

それは兎もあれ、支考が蕉門の高材逸足たるは萬人の齊しく認める處である。かゝる支考が生涯中可成り興味の多からうと思ふ芭蕉遷化當時の行動を記すに先立つて、その生地、撰著等に就いて簡單に述べて見よう。

第一に生國姓氏である。これには諸説がある。

文學士土岐琴川氏(四高出身)著、「新撰美濃誌」に、「俳諧師支考(渡邊氏)は北野村の生れにて芭蕉の門人也云々。」「行脚怪談袋」に、「生國は近江の者なり。住所は京都にて云々。」「宮島六鼠」、「野盤子支考」に、「支考は濃州芝原北方村の人、各務氏云々。」

右三説の中、私はその何れにも一部或は全部の誤謬のあることを確證しておきたい。以下暫く、「山縣郡志」「岐阜縣案内」「風俗文選」「本朝文鑑」「俳家奇人談」「俳人百家撰」等により、自ら正鴻と思ふ説話を引用して、支考なる者の素性を描出する。

支考は徳川第四代將軍家綱の世、寛文乙巳五年(紀元二三二五)、村瀬兵四郎の二男として、美濃國山縣郡山縣村北野に生れた。童名を丑松といひ、後各務氏を繼いだ。その後裔は現存してをる。支考の村瀬氏なることは、「本朝文鑑」書狀類中に記載せられたる「酒盛移文」の作者橋佐渡入道が支考の狂名なること、野航各務吉左衛門重治が支考と從弟にして別姓村瀬氏なること等によつて推察し得ると思ふ。「新撰美濃誌」に支考は渡邊氏とあるは、「本朝文鑑」の白狂傳(自叙傳)に、渡部を以て「是は我家の別姓ながら」とあるのを誤つたのではなからうか。

幼時は同字の禪閣臨濟宗妙心寺派別格、雲黃山大智寺に入つて靈鎮といひ、後に鎮藏主又鎮藏座主と改め、播磨の盤珪禪師を師とした。支考の禪機はこゝに漸く養成せられんとしたのである。盤珪禪師に關しては、

支考の「十論爲辨抄」「本朝文鑑」により臚ろげながら知ることが出来る。この後蕉門に入るまでの傳記は、「白狂傳」、「俳家奇人談」等に明かである。が著名な話を一寸記して見る。

延寶丙辰四年、この年支考は十一歳に達した。この秋の暮、支考に始めて句作の事がある。一日大智寺内の紅葉を見て、

いろは葉に出て散りぬる紅葉かな

支 考

或は時日は不明であるけれども、「吹毛劔也春三月、斷腸牡丹花下風」といふ偈を作つて、宗門の高僧に末頼もしく思はれたといふ。其の後、東都或る寺の大會に、碧巖の講主へ八ヶ條の荆棘を難問して、却つて法眷にその才を妒まれ遂に禪機を挫いたが、それからは勢陽山田に身を匿して、何時となく風家に親しみ交はる。時に貞享甲子元年、支考年十九。還俗に當つて有名な句がある。

蓮の葉に小便すればお舍利かな

支 考

その頃山田には恰も芭蕉の直弟子神風館涼菴が居つた。

蛇足ではあるが、支考の蕉門に入る次第は、元祿庚午三年三月三日、支考は丈草、乙由に伴はれて、近江國石山幻住庵にありし芭蕉に面會して遂に入門した。この年支考は二十五歳。芭蕉は江州石山の奥、國分山の幻住庵、木曾塚の無名庵に來往してゐたのであつた。支考が自ら渡部狂といふ變名を用ひ、支考自身を師と呼んで書いた「削掛の返詞」に、「我師と祖翁との初對面は元祿三年三月桃の日なり木曾の無名庵にて丈草乙州同道なり云々。」然るに越人の「不猫蛇」には「支考は子を頼で翁へ行きし時は出家にて云々。」とて、恰も越人が申引したかの如く見える。「俳家奇人談」には、「涼菴其才を惜み俳諧をすゝめて、蕉門に入らしむ。」堀田麥水の「麥こがし」には、「舊師(支考)は先師(涼菴)手びきにて翁に面會入門せり舊師先師兩吟の俳諧今

なほ我許にあり舊師も正風に入らぬ先は殊の外俳諧放散にてまごまりなけれど固より天の成せる良才なれば正風について後は敵なし云々。」湖東に芭蕉が節を留めたる際に、涼菴の訪れたといふ記録は見當らん。涼菴の手引といふのは或は紹介状位であつたかも知れない。

猶この外、支考の入門は元祿五年といふ説もあつて、芭蕉が幻住庵を結んだのは元祿三年四月だからといふのらしいが、それは他日の考證を待つことにする。

これから後の支考には大分交渉が多いが前置の部ではあり、限られたる紙數では到底盡せぬから極めて重要な事を簡略に述べることにする。

元祿辛未四年十月、芭蕉に伴はれて江戸に下る。

元祿壬申五年、春更に江戸を發して松島象潟の旅に上る。是支考吟行の始である。五月十五日俳論の第一書なる「葛の松原」を撰した。以後終生吟行を事として、北陸、關西、中國、四國、九州と、その足跡と、俳風は海内に遍きに至つた。然も旅行より歸れば則ち著作をなす故に、撰著最も多く、俳論の著述に於ては或は古今の獨歩といつて可いかも知れない。

元祿甲戌七年十月十二日、大坂御堂前花屋に於て芭蕉の遷化にあふ。

寶永庚寅七年、ことしは芭蕉翁の十三回忌に相當する。三月十二日、支考は洛の双林寺に海内の門葉を會し、洛陽の宗匠を請じて、三日三夜の法會を催した。銘を自撰して、所謂假名の碑を境内頓阿法師の墓に並んで建てた。これは本朝に假名の碑の嚆矢であるといふ。以後年々三月十二日を以て、碑文の墨を新にする慣例を作り、都にひとせの行事の如くにして、永く後來の門人に催促した。之を東山の墨直しといふ相である。(雙林寺修石碑教參照)、(尋常小學讀本卷十一第一課吉野山の章の、

歌書よりも軍書に悲し芳野山

支考

の吟は同じき年も陽春、百花繚亂の綾を織る頃の、所謂「庚寅紀行」中の吟であつた。時に支考年四十六。寶永辛卯八年八月十六日、自ら終焉の記を作り、風交を絶つて故山、山縣村北野梅泉院境内獅子庵に隱棲し、(芭蕉の歿後は山田の十一庵に居つた)「梅花佛」の碑を自ら題して傍に建立した。之は現存してをる。支考はかくして假に世を脱して、愈支考の二字を削り、從來使用して來た雅號を抛つて、門人白狂、門人渡部狂その他の名にかくれて天下俳諧の形勢を覗ひ、幾多の著書を偽作して、生前の支考を稱讚する事になつた。當時、山縣村に在任、支考と交游した俳人は、六芝各務孫左衛門重亮以下、十數人に達した。これらの人の略傳等は、支考の、「本朝文鑑」並に「山縣郡志」に、僅かではあるが出てをる。支考が常に勝遊した處は郡内嚴美村太郎丸の杜若で、之は「増補岐阜縣案内」に載つてをる。今は燕子花の名所である。正徳乙未五年、湖南の木曾塚義仲寺に至つて、蕉翁の廟前に名殘を惜しみ、「發願文」を著しなどして、殆んど公然の生活に復らんとするやうになつた。

享保辛亥十六年、二年ほど以前から疝痛を發してゐたが、春未だ淺い頃、

極樂の指圖や蓮の植所

支考

の一句を一生の云ひ止めとして(寶曆五刊蓮二吟集)、二月七日、齡六十七にして、本土美濃の獅子庵に於て黄泉の客となつた。門人、遺言により、雲黃山大智寺の西の岡、梅泉院の梅花佛鑑塔の下に遺骨を收めた。今猶、獅子庵では毎月十六日、支考の流派を慕ふ者が寄つて俳諧を興行してをる。

次に支考の字及雅號に關しては短簡に述べる。先づ字である。

盤子 支考の字は之である。「風俗文選」の作者列傳中に「支考字盤子」。「俳家奇人談」に、「野に在るとき

は盤子と呼び云々」。或は

野子又は野盤子「風俗文選」に寄せたる支考の序文に「野盤子」なる落款があり、支考の「名説」には「花にたはふれ月にそふきて野に寝る時は野盤子といふ。」「自造終焉記」に、「支考の名をけつれるより東華坊もなく西華花もなく獅子庵もなく野盤子もなく云々。」「圖司墓記」に亦野盤子なる三字を使用してをる。次は雅號である。是は數が多い。

東華坊 或は東花坊

西華坊 或は西花坊 この二は相並んで用ひられた。「風俗文選」の作者列傳に「號東花西花」。『俳人百家撰』に、「東花坊、西花坊の稱あり。」「俳家奇人談」に、坊號を東華西華と唱ふるは四方へ逍遙するの謂なり。「陳情表」に、「我々に東華坊ありて西にあそぶ時は西花坊ともいへり東西の二華は支考が坊號にして云々。」「名説」に、「華字は光也榮也」。この雅號が俳諧の字訓をなせる由を記しては、「鶯の笠にぬひ時鳥の雪とちる歌人の花にはあらず」といつてをる。

獅子庵 又四々庵 是は晩年山縣村に隱棲した當時の坊號である。「名説」に、「家に歸る時は獅子庵といふ實は黃山の一支考にして云々」。支考に、「獅子庵三咏」「獅子庵記」の作がある。この號は諸書に散見する。桃花仙 「文鑑」に、「桃花仙は支考の詩號なり」。

十一庵 芭蕉の歿後に一時山田の十一庵に僑居して吟行著作を事としたからであらう。

見龍 「俳家奇人談」に、見龍とは醫に隱るゝの名」とある。

癩乙子 「文鑑」に、「例に我師の隱號ながら某に莊子をよめる時の問題とぞ。」「名説」に、「癩乙はその跡をかくせり」。同註に、「癩乙は彼が跡を隠せる乙とは岩に掛けて寝る其角の形容なり」。

華表人 「文鑑」に、我師の隱號ながら文法の奇怪を憚て爰に丁零が鳥を云へるならん。或は、「華表人は丁零が再生を含み云々」。

黃山老人 黃山とは雲黃山大智寺を指す。江北房の「讀徒然讚」に、「黃山東華坊」なる文字が見え、現存する獅子門統宗匠の連塔に黃山老人の四字が刻まれてをる。

白狂 「文鑑」桃花老仙、花鳥詩有感に渡白狂とある。

蓮二房 「俳家奇人談」に、「白狂蓮二は假に設る所にして道の爲たること三類の圖に知らる。」「文鑑」序文に、「蓮二が臂を机右の邊にかゝげて白狂が眼を燈下の註にあらつて云々」。

獅子老人 「奇人談」に、「家に在る時は獅子老人といふ」。

十名子 「撰本朝文鑑序」に「十名子」の落款がある。

萬寸 饅丁 是佛坊 共に「名説」に見えてをる。

梅花佛 「俳人百家撰」及び「俳家奇人談」に見える。

橘佐渡入道 「文鑑」に、「我師の狂名ながら某(越後高田)の隣國なればならん但我師は橘の庶流なり」。坊主仁平 「文鑑」に、「我師の狂名なり」。

この他に、烏有仙、麥蝶氏、博望、瑟瑟庵、橘尼子等がある相である。

次に支考の撰書をその事蹟を主として出版年次に掲げる。出版年月は略する。

葛の松原、奥菜、笈日記、續五論、新百韻、梟日記(寫本)、西華集、櫻山伏、七回忌、歸花集、東華集、そこの花、東西夜話、夜話狂、浪化追善、草刈苗、草枕、白陀羅尼、三疋猿、露の光、三日歌仙、十三回忌、東山萬句、家見舞、南無俳諧、夏衣、越の名殘、白扇集、貞享式、十七回忌、東山墨直し、阿難話、

俳諧十論、發願文、梅のわかれ、本朝文鑑、露川責、折楔、俳諧古今抄、新撰大和詞、獅子物狂、蓮の葉風、三十三回忌、三千化、十論爲辨抄、梅十論、和漢文藻、桃の首途、伊勢行、十論拾遺、東花式、三日月日記、削掛の返詞、麻刈集、論語先後鈔(寫本)、俳諧白馬與義解(一名芭蕉翁二十五條解)、續五論拾遺、寸の字、絲柳、大和助辭解、夏衣抄、初茄子、霜の花等。又元祿戊寅十一年五月京都寺町通二條上ル町井筒屋庄兵衛出版の、「續猿蓑」は芭蕉の遺著と稱するも、實は支考の僞作なりといふ説もある。

支考の開いた美濃派又獅子門派は年を経るとともに愈榮え、現に岐阜市外加納町清水に住する桂園森孫一郎はその二十八世の宗匠と稱せられてをる。これらの宗匠に關する研究も面白いが、今は宗匠と否とに係らず美濃派の系統で目下猶論せられてをる人名を擧げる。それは太田巴靜、仙石盧元坊、田中五竹坊、横井也有、加藤曉堂、堀田麥水、白居、土朗、素榮、樗堂、岱青、蕉雨、平角、椿堂、秋舉、卓池等である。

これだけ前置として愈本文に入る。本文は九月二十日までは支考の、「笈日記」により以後十月十八日まで文化庚午八年肥後八代の僧東肥乞隱文曉新撰俳諧辭典附錄俳諧人名譜中には、西天庵と號す、肥前正教寺の住職、文化中西天庵夜話等あり。の出した「芭蕉翁反故文」、一名「花屋日記」を主とし、泉州茅渚浦の人茅沼奇淵大黒庵また花屋庵と號す、五年五月十八日、享年七十六にて歿したり。著書に「綾羽」とり。の著した、「芭蕉袖双紙」、及び晋其角の、「枯尾花」、天明の俳人蝶夢の、「芭蕉翁繪詞傳」と、支考の、「笈日記」によつて研究しようと思ふのである。それに先立つて、「花屋日記」を僞書なりと説くものゝある事を一言したい。その原因の一二としては

- (一) 元祿七年に於て、かばかり具さに記述されたる日記が、何故に約百二十年後の文化七年に至つて、突如として初めて現はれたるか。
- (二) 文曉何故にその書のはし書に、此の日記の草稿を得るに至りたる徑路を語りざりしか。

(三) 門弟代るゝ記したりといふ文章の、何分にも同一文致に屬する事。同じ書中の消息文が往復とも同一の語調に出でたること。

(四) あまりに行互り過ぎたること等。
私を以て言はすれば、猶支考の「笈日記」上巻とまゝ一致しない点のあることを加へたい。然し「笈日記」上巻は翁の死後同年の冬季、歸鳥庵で記された物であるから、或は支考に記憶違ひがあつたかも知れん。兎もあれ今のところは是らの議論に確かな證左はないのである。

芭蕉遷化當時の支考を、唯支考だけの傳記として取扱はうといふことは、私にとつては甚だ困難な仕事である。止むを得ず、半ばは芭蕉の死その物を主とした。かくすれば、その間に多少は支考の内面生活等も覗へると思ふからである。

二

元祿甲戌七年(二二三五四)、六月に松尾芭蕉は武江より舊里伊賀に歸省し、洛に赴いて桃花坊を訪ひ、湖の木會塚に納涼して、七月の初め、再び伊賀に歸つて親しき人々の魂祭をしたが、この年九月の初め、復、難波津へ旅立たうとした。

○九月二日、支考(二十九歳)は、難波津にて芭蕉が抖櫻の後は、必ず伊勢にも迎へようとして、斗從をいざなひ、この日伊勢山田の寓居を出立した。

○九月三日、夜、伊賀なる蕉翁の草庵に著く。草庵まうけもいと心寂びて、
蕎麥はまた花でもてなす山路哉

翁

松茸やしらの木の葉のへばり付

同

支考はじめ一座の連中は、この松茸の句をその夜の歌仙の巻頭に乞うけて一夜の歎をつくした。

○九月四日、夜、某亭に會して

松茸や宮古に近き山の形

惟 然
支 考

支考のこの新酒の句は、山路を夜寒にすべきであるが、集などに出すには、もとの山路が適當であらうなご、その會の終つての歸るさ、支考は惟然(廣頼氏、美濃武儀郡關町、又は不破郡關ヶ原村の人といふ。始めには素牛といひ、嘗て蕉門に遊遊せし頃は、俳諧の狂者とさへ言はれた。後に改めて惟然といふ。鳥落人は彼の標號である。家素富有なりしが、後甚だ貧し。風羅念佛を唱へて風狂して歩いたといふ。寶永庚寅七年五月二十七日死去す。)など語り合つた。

○九月八日、この日より後の記事は、芭蕉翁の終焉記を書くにも等しい。

芭蕉翁の、奈良の舊都の重陽をかけんとて難波津への旅行は、この日に決行することになった。御旅伴の人々は、支考、惟然と翁が兄壽貞の子次郎兵衛との三人である。人々の送り迎へを煩はしとて、朝まだき狭霧靜かに立ち置めたる頃に發足した。この日の中には必ず奈良までと急いで、笠置より木津川の河舟に乗り、錢司といふ所を過ぎて、山の腰の蜜柑畠を愛でつゝも、笠置の峯の秋の名残を惜しむ。舟中支考は蕉翁の、山はみな蜜柑の色の黄になりて、の句を持ち出して、翁らと歡談した。舟を上り一二里を歩いて、奈良猿澤池畔に宿を求めたのは、正に黄昏も晦くなる頃であつた。その三夜更なる比、猿澤池水のほとりにて、

ひいと啼尻聲悲し夜の鹿

翁

鹿の音の糸引はえて月夜哉

支 考

明くれば、

○九月九日、重陽の節句である。蕉翁の、「菊の香や奈良には古き佛達」の句は、この日の吟であつた。

霜をかぬ三笠のかけや神の菊

支 考

更に翁を始め、猿雖、尾頭、萬乎、羅香、射江、荻子、望翠、諷聲、長年、土芳、卓袋、水固、東來、舟峰、陽和、配力、吹衣、苔蘇、一桐、祐甫、仙杖、風睡、我峰、魚日、雪芝、佛杖、九節の二十七名の發句並に支考を始め、猿雖、土芳、萬乎、卓袋等して歌仙一集。

(歌仙略之)

菊に出て奈良と難波は宵月夜

支 考

この發句は元祿庚辰十三年九月發刊の「東華集」に出てをる。

この日は難波津へ渡らんとて奈良を立ち、生玉の邊りにて日を暮らす。

○九月十三日、今宵は十三夜の月をかけて住吉の市に詣でたけれども、晝のほとよりの雨に吟行も自由には行かなかつた。近頃中、殊に夕暮々々に、翁は惡寒に惱んでゐたが、此の日も亦同様であつた。

○九月十四日、夜、翁はいと心地よく、畦止亭に赴いて前夜の月の名残をつぐなうた。

○九月十六日、夜、去來、正秀よりの書信に接した。文面は不分明であるが、兩人は奈良に居たのかも知れない。「笈日記」に、「奈良の鹿殊の外に減じてその奥に人々の句あり。」とある。人々とは、丈艸、野明、荒雀、爲有、風國、去來、正秀である。

きよつとして霰に立や鹿の角

支 考

其柳亭に泊つたのは、此の夜あるひは、それより二三日前の事である。

○九月二十一日、雨ふりて、天地寂寞枯槁の秋である。泥足の案内で、翁らの一行は、清水淨瀨の茶店に清

遊した。泥足の願により、

此の道や行く人なしに秋の暮

翁

この句に、「所思」といふ題をつけて歌仙一折。この歌仙は花屋庵奇淵の「袖双紙」に見えてをる。連中十人。「笈日記」には十二人とある。

旅 懷

此の秋は何で年寄る雲に鳥

翁

の句は恰もこの日の吟であつた。翁は、「今度は忍びて西國へと思ひ立ちたまひしかど何となくものわびしく世の果敢なきこと思ひつけ」られたといふ。一行の旅愁はまた深かつた。この日の記事は「笈日記」では二十六日となつてをる。

○九月二十二日、今日も亦雨である。「笈日記」では車庸亭に赴いた。

○九月二十六日、蕉翁始め、支考らの一行が、岡西（渡會）園女の亭に赴き、山海の珍味を以て饗應せられた日である。連衆は九人。歌仙一卷は例の「袖双紙」に別記せられてをる。

白菊の目に立て、見る塵もなし

翁

「笈日記」に、「是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし此日の一會を生前の名残とおもへばその時の面影も見るやうにおもはるゝ也」。是は支考の追憶である。

○九月二十八日、今宵は九月二十八日の夜なれば、畦止亭に赴いて、秋の名残を惜しむとて、七種の戀を結題にして各々發句をつくる。この發句は泥足の便集に出てをるといふ。

○九月二十九日、芝柏亭に一集すべき約諾であつたが、數日うちつゞいての重食に、翁はやゝ不例であつた

ので、沙汰止みとなり、その代りとしてほつ句を遣はされた。

秋深き隣は何をする人ぞ

翁

この事は、「笈日記」には二十八日となつてをる。猶「花屋日記」には、「この夜より翁腹痛の氣味にて泄瀉四五行なり尋常の瀉ならんと思ひて薬店の胃苓湯を服したまひげざれも驗なく云々」。胃苓湯の説明は平岡水走の「方苑」に、治脾胃不和腹痛泄瀉、水穀不化、陰陽不分、回春、蒼朮、桑寄生、厚朴、姜汁炒、陳皮、猪苓、澤瀉、白朮、吉藎、茯苓、去皮、白芍、煨各一錢、肉桂、甘草、炙各二錢、右剉一劑、生薑棗子煎、空心温服。」拙庵「衆方規矩備考大成」には右の中「肉桂に代ふるに黃蓮を以てし分量的に各等分。」とあるといふ。翁が泄瀉の時に就いては、幻阿彌陀佛蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」並に晋其角の「枯尾華」では長月三十日となつてをる。發病の要点に關しては、柳義雄の「松尾芭蕉」に、「此の門出の節多少寒胃の氣味ありと見え心身何となく違和を感じ殊に木津川の夜舟は大に心氣の疲勞を覺え舟中時々惡寒を催し難波につきても時々惡寒ありて元氣大に衰へて見えたり」。私はこゝで翁は九月八日に笠置より奈良へと河舟に乗つた時からもう不例であつたのを知つた。泄瀉の病原は惟然が去來に與ふる書に「園女亭にての菌の御過食と相考候」といひ、其角も之を是認して居るが、然しそれは九月二十六日で發病前四日であるばかりでなく、「花屋日記」二十九日の條に「數日打續きて重食し給ひし」とあれば病因が過食である事は明かであるが、園女ばかりが全責任を負ふべき理由はなからうと思ふ。

○九月三十日、翁が泄瀉の度數次第に加はる。

○十月一日、翁は夜中二十餘度の通氣があつた。

○十月二日、翁の通痢朝より三十餘度、支考は惟然と内議して翁に、「いかなる良醫なりとも招き候はん」と

いへば翁はいふ、「われ本元虚弱なり心得ぬ醫に見せはべりて薬方いかゝらんわが性は木節ならで知る者なし願くは木節を急に呼びて見せはべらん」。木節は蕉門の俳士で、大津にをつた。支考惟然是消息を認めて木節を呼び、翁の命により猶京の去來にも消息を遣した。去來への状はかうである。

飛脚便に申し遣はし候老師一昨々夜より少し惡寒氣御座候ところ起居穩かならず候之道不勝手に候ゆゑ御不自由と存じ、取りはからひ候ひて御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏座敷奇麗閑靜に候の條借り受け之道請判にて先づ寓居と定め候ところ今朝は別して御氣分心もとなき御容態に候醫者呼び申す筈に候へども早く木節に御容態お見えなされ度との御事仰せられ候條則ち木節に別紙遣はし候此の状着次第貴雅にも早々御下り相待ち候木節御同伴候様に存候隨分御急ぎ下さるべく候不一

十月二日

惟 然
支 考

去 來 様

尙々別紙急々木節に御届頼み存候以上

木節への状は去來へのと同一の飛脚便にて出されたものと見える。翁の病症は夜に入つて益々憂ふべきものとなつた。惟然是子の時去來へ宛て第二信を遣はした。「われらはじめ之道手を握り候までに候此の状着次第木節同伴にて急に御下り相待ち候南久太郎町花屋仁左衛門と御尋ね早々御入りなさるべく候急々以上云云」。

次は轉居の件である。芭蕉らは以前、之道亭に宿泊してゐたが、この亭は狭くして外に間所もなく多數入

り込んで保養介抱も不自由であるので、色々立ち廻り漸く御堂前を借りうけた。この夜直ちに介抱して花屋に移る。十月三日の夜は明けてゐた。

○十月三日、天氣曇る、翁の泄瀉晝夜に二十七行。夕暮、翁は支考を召して殊の外に心の安置したる旨を告げた。介抱の者共一同に、「さばかりの知識達も生死は天命とこそおほし候へたゞ心のやすからんはありがたう侍る」とて安堵した。「笈日記」には轉居は五日の朝でその暮に叙上のことがあつたとある。私は例の「花屋日記」により暫く二日の夜の轉居と定め、この出來事は三日の暮としておく。

夜半過ぎて去來が來た。二日朝の支考、惟然の状は三日の朝届き直ぐに打立ち 伏見に出たのは巳の時であつた。それより舟にのり八軒屋に着いたのは亥の時であつたと語つた。「花屋日記」支考の手記に、「(去來)すぐに御病床にまゐりたりしに師もうれしさ胸に迫り暫時はものたまはざりしが諸國に因みし人々はわれを親のごとく思ひたまふにわれ老ぼれてやさしきこともなければ子の如く思ふこともなく殊更汝は骨肉を分けし思ひあれば三日見ざれば千日の思ひせり然るに今度かゝる遠境にて難治の榮薪の患に罹り再會あるまじく思ひ居たりしに相見ることのうれしさよとて袂をしばりたまへば去來もしばしは嗚咽せしが暫くしていふ僕世務に暇なければさせる實意も盡さるるにかゝる御懇意の御言を蒙ること生をへだつとも忘却つかまつらずと數行の泪に咽ぶ」。

何様賣藥の効驗が心もとないので、去來は再び消息を認めて飛脚便にて木節に遣はした。夜子の時追つていて木節が來た。二日出の支考惟然の消息はその夜着いたので大津を丑の時に立ち一番船に乗つたが短日故遅着したと語つた。諸子に會釋もそこくにして、直ちに翁の容態を伺ひ脈を診し、逆逸湯(瀧澤馬琴、「俳諧歳時記栞草」の「芭蕉記」に、「逆挽湯」を調査した。逆逸湯の説明は多紀櫛窓の「觀察方」に、「逆逸湯本朝治

一二日微熱泄瀉數十行而後血裏急後重、蒼朮一匁、肉桂一匁、茯苓八匁、乾姜八分、枳殼五分、甘草一匁、生姜一匁、人參六分、右水煎、腹痛加檳榔木香。」とある相である。柳義雄は「食慾を進める爲め逆逸湯に宿砂、藿香を加へ人參の量を増して衰弱を防げり」と記載してをる。

○十月四日、天氣よし。車庸、畦止、諷竹、舍羅、河中等は翁の病氣を知らずして之導亭をまはつて花屋に來た。

翁の泄痢は三十餘度に及ぶ。度毎に裏急後重があつた。

翁の病輕からずと見た門弟は、持久策として、「問尋の人たりとも猥りに座敷に通るまじく」と貼紙を出して交通を遮斷した。朝、木節の計らひで道修町伏見屋より朝鮮人參半兩、包香十五袋をとりよせる。且、翁を始め一座連中の衣裳を濯がせんとして、之道の世話で洗濯老女を備つた。

又、この日の介抱人は支考と惟然とであつたが、逆も手が届き兼ねるので、之道の取計ひで按摩役など、して舍羅、吞舟を招きよせた。

次郎兵衛が、座敷入用品請取覺並に座敷附の道具品々覺の控帳を仁左衛門に渡したのも此の日である。

○十月五日、天氣曇り、寒冷が強い。翁は時々惡寒の氣あり、夜中までに泄瀉五十度。「夜着蒲團またく五流、米一斗、醬油二升、鹽一升、味噌三升、薪二十束、炭二十貫目、雜紙三束」。今日翁は食をとらずた湯索麪二箸であつた。朝湖南の正秀、夜船で來り、次郎兵衛は天滿に詣り午過ぎに歸つた。夕暮、乙州、丈草來り集ひ、平田の李由も相次いで來た。(笈日記では七日である。)

○十月六日、天氣陰晴極らず。翁の朝食は煮麪三箸。「花屋日記」に、「前夜終宵寢入りたまはず暫く睡眠したまふ御目覺より去來を近く召して先の頃野明が方に殘し置きはべりし大井川に吟行せし句、大堰川波に塵な

し夏の月、この句あまりに景色過ぎたれど大井川の夏氣色言ひかなへたりと思ひのたりしが清瀧にて、清瀧や波に散りこむ青松葉、と作りし事柄は變りたれど同巢なりと人の言はんも如何なれば大井川の句は捨てはべらんと汝に申したり然るに頃日園女亭に招かれて、白菊の目にたて、見る塵もなし、と吟じたりこれ亦同案に似て句の筋同じそれゆる前の二句を一向に捨てはべりて白菊の句を殘し置きはべらんと思ふなり汝が意如何。去來は泪を浮べ、「名匠のかく名を惜しみ道を重んじたまふありがたさよわづか句一章にさまで千辛萬苦したまふ御病惱の中の御骨折風雅の眞情こそ尊けれ眼ある者何者か此の句を同案同巢と見るべきおそれながら此の句を同案同巢など、申す者は無眼人と申す者なり(中略)青台日厚、自無塵これは是れ隱者の高儀をはめたる語今は園女がいまだ若くして陌上桑の調あるを讚めたまひたる吟なり意も妙なり語も妙なり世人此の句を見る者園女が清節を知らん波に塵なしの語は左太仲が必非、非、非、竹、山水、有、清音といへる絶唱も思はれ園が二夫に見えざる貞潔と大井清瀧の絶景と二句の間相違つて感じてあまりあり」といつたので翁の機嫌はよかつたといふ。これは有名な話で、芭蕉は世には客觀詩人といはれてゐるが實は主觀詩人で、この話は則ち門弟に對つて主觀的なれど教へたのであるといふ説がある。夫れは兎もあれ、「笈日記」には九日にも服用の後支考にむきて、「此事は去來にもかたりおきけるが此度嗟嗚にてし侍る大井川の句おほへ侍るかど申されしをなつに答へて、大井川浪に塵なし夏の月と吟じければその句園女が白菊の塵にまぎらはし是もなき跡の妄執とおもへばなしかへ侍るとて、清瀧や波にちり込青松葉 翁」。

○十月七日、朝より不相應の暖氣である。曇つて雨もふらず。園女より見舞として菓子などを贈つて來たが、之は次郎兵衛の計ひで之道に遣した。藥方は逆逸湯に加減。然し翁は終日藥をのまず、入麪を好む。鬼貫來り去來應對して還し、園女、可中、渭川來り支考が會釋した。夜に入つて天氣は霽れた。夜になつて人音も

静かである。支考らは灯の下で伽してゐたが、唯今の體にては翁の恢復も覺東ないからとて、静かに枕上に伺ひより、去來は機嫌をはからひ滅後の俳諧の處置を質ねた。翁は次郎兵衛に扶け起され息をついて、眞行草の三つを離れざる旨を諭した。話し乍らも翁は喘ぐ。吞舟は翁の口を潤はし薬をまゐらす。

○十月八日、天氣快晴、翁の泄痢六十度に及ぶ。不食である。京の(花屋日記)士が來た。信徳より消息を以て翁の病體を問ひ、近江の角上から使が來た。夜に入り、嵯峨の野明、爲有より消息を添へて柿を贈つて來た。然し二日の朝伊賀への常飛脚はないので、幸ひ羅漢寺の弟子が伊勢へ越えるに狀を頼んで遣はしたが、今日まで何らの音信も無い。去來、乙州が相談して態と飛脚を差立てようと翁に伺ひ、止められたのは此の日。支考らの面々は翁が一類中の騒ぎ、殊に主公藤堂公の聞召を慮つたのに感じ入つた。

この日、去來が翁の機嫌をはからひ、「古來より鴻名の宗師多く大期に辭世ありさばかりの名匠の辭世はなかりしやと世にいふ者もあるべしあはれ一句を残したまは門人の望み足りぬべし」と言つて、却つて翁より叱責されたといふ有名な話は、支考、乙州らに煽動されてゐた。傍より次郎兵衛が口を潤すに隨ひ玄々微妙、翁は息の限りいふ。「きのふの發句は今日の辭世けふの發句はあすの辭世われ生涯いひすてし句一句として辭世ならざるはなし(中略)諸法從來常示寂滅相これは是れ釋尊の辭世にして一代の佛敎此の二句より外はなし古池や蛙とびこむ水の音此の句にわが一風を興せしより初めて辭世なりその後百千の句を吐くに此の意ならざるはなし」を以て句々辭世ならざるはなしと申しはべるなり。

之道らが住吉の四所に詣で、翁の延年を祈つたのも此の日である。「花屋日記」に、「人々勝手の間にて今度の御所勞平復を祈り奉らんとて住吉大明神に連中より人を立つべしと去來申し送られればおのゝ然るべしと之道次郎兵衛は圖當りにて社務林采女方に祝詞を頼み厚く神納の品々送らる」。

奉納

おこさるゝ聲もうれしき湯婆かな

支考

其他、木節、正秀、丈艸、吞舟、伽香、惟然、之道、乙州、去來各詠。大勢の集會とて歡び興じて翁を慰めた。然し木節だけは道が醫者だけに、「今朝御脈をうかいひ見申すに次第に氣力も衰へたまふと見えて脈體わるし(中略)願はくは治法を他醫に求めんと思ふ」と去來の取次で翁にいふ。翁は、「木節が申條尤なれども如何なる仙方ありて虎口龍鱗を醫すとも天業奈何せんわかれかく悟道しはべればわが呼吸の通はん間はいつまでも木節が神方を服せん他に求むる心なし」。支考はこれを評して曰く、「風流道德人みな間然することなし」。

○十月九日、諸子の取計ひで、翁の古き衣裳夜具などを脱ぎかはし、よき衣に召し更へまゐらす。翁、「われ邊地波濤のほとりに草を敷寝塊を枕として終りをとるべき身のかゝる美しき褥の上にかも未來までの友ごちにぎくしく鬼録に上げらんこと受生の本望なり」。此の日より翁は殊更に衰へて、泄瀉の度數は知れぬ程であつた。

翁は丈艸と去來を召し、「昨夜目のあはざるまふと案じ入りて吞舟に書かせたりおのゝ咏じたまへ、旅に病むで夢は枯野をかけめぐる、枯野をめぐる夢心、ともしはべるいづれなるべきこれは辭世にあらず辭世にあらざるにもあらず病中の心なり併しかゝる生死の一大事を前に置きながらいかにかに生涯好みし一風流とはいひながらこれも妄執の一ともいふべけん今は本意なし」。去來曰く、「さにあらず日々朝雲暮雨の間も置かず山水野鳥の上も捨てたまはず心身風雅ならざるなくかゝる河魚の患につかれたまひながら今はのかぎりにその風神の名章を唱へたまふこと諸門葉の悦び他門の聞え末代の龜鑑なり」とて涕すゝり泪を流す。列座

の面々は感慨悲想し慟絶して聲もなかつた。八日の夜の事は、「笈日記」に、「此の夜深更におよびて介抱に侍りける吞舟をめされて硯の音のかうくと聞えければいかなる消息にやとおもふに病中吟旅に病て夢は枯野をかけ廻る翁その後支考をめてなほかけ廻る夢心といふ句つくりありいづれをかぞ申されしにその五文字はいかに承り候半と申はいとむつかしき事に侍らんと思ひて此句なにかおどり候半と答へける也いかなる不思議の五文字か侍らん云々」。

○十月十日、初時雨。翁の病勢益々暮り、夜の明がたより度數知れずひとしほ惱み給へり折節に謔言ありてとりとめなきこと多し申の下刻に至つて人心地つきたまふ。又、「諸子うち寄り食事をすゝめまゐらせければ、みたまはず梨實を望みたまふ木節かたく制しけれど頻りに望みたまふゆる、已む事を得すゝめければ一片味ひて止みたまふ」。

木節はいふ。「脾胃受るところなし。死期近きにあり」。此の日は芍薬湯を盛つた。芍薬湯の説明は平岡水走の「方苑」に、「虚弱人初痢宜清之回春、芍薬二錢、木香一錢、當歸、枳殼去穢、檳榔各一錢、黄芩、芍药、甘草五分、右剉一劑、水煎温服」。拙庵の「衆方規矩備考大成」に分量的關係を異にして、黄蓮、黄芩各一錢、木香、檳榔各五分とある相である。第二方は例の「方苑」に、「戰汗後下後復越二三日反腹痛不止者欲作滯下也無論已見積未見積此湯主之 温疫、厚朴、芍薬、當歸各一錢、檳榔二錢、甘草七分」。

今日は門弟で食したる者は一人もなかつた。

○十月十一日、朝またく時雨、やがて空晴れて日影もさし入り、障子日向に蠅が群つてゐた。人々が鳥糞を以て蠅をさしとつて歩くに、それに上手下手のあるのを見て、翁はしばらく興に入つてゐたが、大病中の事とて忽ち厭き、ぢきに寢所に入る。「笈日記」に十二日とある。）

此の日、支考は、「師の發句を滅後に一集せん心願あれど此の頃の病苦に惱みたまふに見合はせむたりしに今日機嫌よきに乗じて申し出ではべらんと去來に申したりければ去來はかねて師の心中を知りたりしゆるる大に怒りござかしきことを申さるゝものかな師は平生名聞らしきこと好み給はず今日やうく快き體を見うけはべりて諸人うれしと思ふ中に御氣に逆ふことを聞かせ申しては御心を勞せしめ申すこと奇怪なり此の後御病床近く寄りたまふな早くその座を立ちたまへと聲あらゝかに次の間に逐ひ立てけり。支考もはからずもの言ひ出して諸子の聞く前面目を失ひしがゆくゝ惟然にうちむかひわれに句ありそこ書きたまへと云ひてしかられて次の間に立つ寒さかな

支考

さすが支考なりければ師もほの聞きたまひておかしがりたまひけり」(花屋日記)。

暮相、思ひがけなく東武の其角が來た。これは參宮の序に和州紀州を廻り、泉州より浪花にうち入つたが、はからずも師の勞を聞きつけ、そこを尋ねまはり漸くに馳せつけたのであつた。其角はすぐに病床に行き、皮骨連立した體を見て且つ愁ひ且つ悦ぶ。翁も見やつたまで、涙ぐむ。其角も言句なくさし俯向いてゐたが、支考、丈艸、去來その外の衆は、其角を次の間に招き病症の始終を物語つた。この夜、夜すがら伽した。亥の時頃、翁は夢の醒めたる如く粥を望むので、人々は嬉しさ限りなく、翁は中當椀にて快く食した。朔日以来の食事である。去來は土鍋に残つた粥を椀にうつして押し戴き、「病中のあまりすゝりて冬ごもり」。惟然、正秀は前夜一つの蒲團を引張つて被つたが、彼方へ引き此方へ引きして、終宵寝入らぬ中に夜も白々と明けた。今その事を互に笑ひ合つて、「引ばりて蒲團に寒きわらひかな 惟然」「思ひよる夜伽もしたし冬ごもり 正秀」。一座を始め、病床の翁までも笑ひ興じた。人々は十日已來の興であると嬉しがつた。木節、乙州、丈艸、其角各詠句。「うづくまる藥のものと寒さかな 丈艸」。惟然が「吟聲するのを聞き

翁は丈艸の句を今一度と望み、「丈艸出來されたりいつ聞いてもさびしをり整ひたり面白し面白し」と、皺腹れ聲で讀められた。

かゝる中にも木節一人は愁を抱いて居つた。其角がその故を問ふに、「病に除中の證といへるあり大病中絶食なるに遽かに食のすゝむことあるは悪症なり死期遠きにあらず」。

「花屋日記」に、「さは知らずおのくさいめきむたるに夜半頃よりまた寒熱往來ありて夜明ごろより顔色土の如く見えたまひ暫くは悶亂し人も見知りたまはざりしがやゝありてまた實正になりたまひ左右に舍羅、吞舟うしろよりは次郎兵衛抱きまゐらせて介抱しほごなく夜明くれば十二日なり」。

○十月十二日、かねては閉ち籠つてゐたが、隔ての障子も襖も取りはなさせ、翁は木節の制するをも用ひずして、行水し、不淨を清め、乙州、正秀を左右にし、支考、惟然に筆をとらせ、座を静かに改めて木節が醫術を盡したる事などをとくくに謝し、其角、去來、丈艸を近く召して、亡き後の事をこまかく遺言した。病苦少しも見えず、人々は奇異の思をした。伊賀の兄松尾半左衛門への遺書は手づから認め、外に京、江戸美濃、尾張と、漏れざるやうに遺言したが、始終は門人の中で筆記した。翁は次第に聲ほそり、痰喘に悩まされた。次郎兵衛は素湯で口を潤はしまゐらせた。

「花屋日記」に、「やゝありて去來に向ひたまひ先頃寶永阿闍梨より路通がことを仰せありその後汝が丈艸、乙州等に贈りし消息露霜とは聞き捨てすしかし少し忌み憚ることありて雲井の外にはなしはべりぬ彼が數年の薪水の勞ゆめく忘れおかすわが亡き後には凡そに見捨てたまはず風流交りたまへ此の事頼みおきはべる諸國にも傳へたまはれかしと言ひ終りたまひて餘言なし。合掌正しく觀音經と聞えてかすかに聞え息の通ひも遠くなり申の刻過ぎて埋火のあたゝまりの冷むるが如く次郎兵衛が抱きまゐらせたるに倚りかゝりて寢入した。

りたまひぬと思ふほごに正念にして終に屬曠につきたまひけり時に元祿甲戌十月十二日申の中刻御年五十一歳なり」。

「笈日記」には、竊で蠅をとるに上手下手のあるのを見ておかしがつた後（十一日の條参照）、「何事もいはずなりて臨終申されけるに誰もく茫然として終の別とは今だに思はぬ也」とある。

即刻不淨を清め、白木の長櫃に納めて、その夜直ちに川船にてしつらへ、淀河を伏見へと上つた。御供の人々は、支考を始め、其角、去來、丈艸、乙州、正秀、木節、惟然、之道、吞舟、次郎兵衛、都合十一人である。花屋仁左衛門が、京へ荷物を送る體にて、長櫃の前後左右を取りまき、念佛誦經、おもひくりに供養した。

○十月十三日、かくして八幡を過ぎる頃には、夜もしらゝと明け放れて、平田の僧李由の下り舟に行き逢ふ。李由は、いざとて一行の舟に乗り移り、互に果敢なき物語りをして程なく京橋に着いた。それから狼谷通りにかゝり急ぎ急いで、巳の時過ぎて大津木曾塚の乙州の宅に入り、生前にかはらず、茶菓の設けをした。送葬は十四日と定まり、用意の整うた時にはかれこれ日没であつた。

「花屋日記」に、「乙州は伏見より先立ちて急ぎて歸り座敷を掃除し清め沐浴の用意す御沐浴は之道、吞舟、次郎兵衛なり御髪延びさせたまへば月代には丈艸法師まゐられけり御法衣淨衣などは智月と乙州が妻縫ひ奉る淨衣白衣にて召させまゐらすべき筈なるを翁は如何なる事にやかねて茶色の衣裳こそよけれどすべて茶色を召されければ智月尼のはからひとして淨衣も茶色の服にぞせられける」。

夕暮、上野より土芳、（松尾半左衛門）卓袋が馳せつけた。臥高、昌房、探芝、牝玄、曲翠等はその日の夜半頃大津に歸つた。これは伏見から花屋へ下つたのである。

御入棺はその夜の酉の刻である。義仲寺の住職眞患上人は道師となり、三井寺常住院より三人の弟子が来て、讀經念佛をした。諸門人一同は通夜して、伊賀の一左右を待つ。夜更くれども更に左右はなかつた。去來、乙州、其角ら評議して、十四日の葬式はいよいよ酉の上刻と極めた。

○十月十四日、送葬の日である。「花屋日記」支考の手記に、「晝のうちより集まれる人は雲霞の如く、帳に控へたる人數凡そ三百人あまり知る知らぬ近郷より集まる老若男女まで惜しみ悲しむ。時しも小春の半ばにて静かに天氣晴れわたり月清朗として湖水の面に輝きわたり名にし粟津の松に吹きおこるは無常の嵐かと思はれて月はおもしろきもの露はあはれなるものといへど折にふれては何か哀れなるものならざらん矢橋の漣に寄する響きも愁人のためには胸に迫り泪を添ふ」。

埋葬は酉の上刻である。引導香語は、「雪月魂魄。風花精神。等閑一句。驚動人天。嗚呼。奇哉芭蕉。妙哉芭蕉。萬里白雲。一輪明月。五十一年。一字不説。」捨香は丈艸、其角、去來、李由、曲翠、正秀、木節、乙州、臥高、惟然、昌房、探芝、泥足、之道、芝栢、牝玄、尙白、土芳、卓袋、許六、丹野、風國、野童、游力、野明、角上、胡故、蘇葉、靈椿、素顰、回鼻、萬里、諷々、這萃、荒雀、楚江、木枝、扑吹、魚光、並に支考。以上四十名。この外、諸國の代香を始めとし、近江國中はいふに及ばず、京、大阪、美濃、尾張、伊勢等より、又その他國々より上洛中の人々の、三世值遇の縁を悦び、われもくど香を手向けたものは何百人とも數へ難い程であつた。翁の兼ねての遺命により、木曾義仲の右の方に埋葬した。埋葬の終つたのは子の時過ぎであつた。

「花屋日記」支考手記に、「境内狭ければ表より入りたる人は裏へ抜けるようにしつらへ置き田の刈跡に道を附ければ焼香の人々はすべて裏へ抜けゝるにぞさして騒がしきこともなく云々」。

○十月十五日、去來、其角をはじめ、膳所、大津の人々、朝早く蕉翁の墓に詣で、整理をした。「花屋日記」支考手記に、「先づとて土かきあげて卵塔をかたどりさいはひ塚のうしろに年古りたる柳あるを其のまゝにし御名の形見とてかれぐの芭蕉をひどもとかねて好みたまひたる茶の木のを盛りなる花と共に移し植ゑて竹もて垣結ひ廻はし香花を手向け奉りけり」。

○十月十六日、支考ら、乙州亭に會して、義仲寺の住持その他の僧徒に、禮物を贈り、且つ翁の遺物等の沙汰に及んだ。是は「花屋日記」にいふ處であるが「笈日記」には、「夜曲翠亭に會しておのくひらき見る云々」とある。この日、去來は其角に宛て、翁終焉記一章の執筆を依頼した。同じ日付を以て、其角よりの返信中に、「一、御終焉記の儀仰せ聞けられいか仕るべきや併し貴命の事に候ゆる取りかゝり見申すべく候御病氣最初よりの御様體貴兄はじめ惟然、支考が覺書は勿論御夜伽の發句等御書付御見せなさるべく候且次郎兵衛日記共に御見せなさるべく候」。「花屋日記」が文曉の僞書でないとしたら、こゝにいふ惟然、支考が覺書とは「花屋日記」の事であらう。其角は此の年の冬、義仲寺牌位下に於て、「枯尾花」の上巻をなせる、「芭蕉翁終焉記」を書いた。

○十月十七日、乙州亭。御遺物の沙汰は、十數点のところ、翁の遺言により、内二三点は支考に附與せられた。即ち享保乙巳十年三月、支考著「十論爲辨抄」の「老後樂」の一部に、「一、支考此度前働驚入候（支考曰く前働は前後の後の字の脱したのかも知れない）親切被申入候實に萬事頼入候草庵之出山佛（花屋日記に一體御長一寸一分）は形見に可被遣候ばせを判」。是は堅紙に認められ、去來が代筆して、杉風、澤子、嵐雪、伊兵衛、好齋老、榮順尼、禪可坊、桃隣等へ宛てたる遺狀の一節である。「支考へ出山佛」の一段と名判とは蕉翁の直筆なる由。更に「十論爲辨抄」の「遺物覺」の一部には、「一、新式書入（花屋日記に「新式」一部）

是は杉風へ可被遣候落字等有之本寫にて可被考候支考も可被寫候。一、文章反故等、右は杉風方に有之文章之草稿は其支考可被爲點檢候。一、古今序傳百人一首、秘聞抄(花屋日記に「古今集序註」一部、百人一首一部)、是は支考へ可被遣候」とあつて、是は横折に洛の去來の代筆したものと云ふ。かくて支考は出山佛一體、古今序傳百人一首、秘聞抄各一部と、この遺狀、覺書各一通とを得たのであつた。支考は遺狀と覺書とは、この後約三十年間、支考の歿する頃まで、深く秘藏してゐたといふ。

○十月十八日、十六日に去來が、「明後日一七日に候條諸國連中退散これなきうち御靈前に於て御追悼俳諧百韻興行仕りたく」とて、其角を招いたその一七日である。俳諧百韻は義仲寺にて卷尾した。この百韻は「枯尾花」に出てをる。連中は四十三人。其角、支考、丈艸、惟然、木節、李由、之道、去來、曲翠、正秀、臥高、泥足、乙州、芝栢、昌房、探芝、胡故、牝玄、游力、蘇葉、智月、吞舟、土芳、卓袋、靈椿、野童、素饗、萬里、諷々、這萃、許六、回鼻、荒雀、楚江、野明、風國、木枝、角上、尙白、舟野、朴吹、魚光、回息。「滿座興行大津膳所京嵯峨攝津伊賀之連衆也各感^{シテ}愁眉^ヲ而不求巧言^也」。

追善の俳諧

なきからを笠に隠すや枯尾花 其 角
温石さめて皆氷る聲 支 考

行灯の外よりしらむ海山に 丈 艸
乃 至

これらの百韻は、翌十九日、去來、其角連名の一封書と共に、松尾半左衛門の許に送られた。又支考、惟然、壽貞が子次郎兵衛、去來、の病態覺書も同日に松尾氏に送られた。同二十三日附にて半左衛門命清より、

晋其角、向井去來、その他の連中に宛て、その受領の旨を報じて來た。

翁が歿してからこの日に至る七日間に、支考に亡師を悼む句がある。日時は判らない。「枯尾花集」に、

傷亡師、終焉^ヲ作^ル句 初七日迄 僧 支 考
鹿の音も入て悲しき野山哉

此の日猶、義仲寺に無縫塔を建設したことが、「笈日記」に見える。塔の面には、「芭蕉翁」の三字をしるし、背には年月日時をしるす。塚の東隅に芭蕉一本を植ゑて、世人に春夏秋冬の盛衰を示すといふ。

これから以後の支考の動靜に就いては、「枯尾花」に、十月二十五日、嵐雪は、「共桃隣出武江而暨義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱」とて武江を立ち、十一月七日の夕月夜のさやかな比ほひ、義仲寺の冢上にさまよひ着いた。かくて嵐雪以下の一行は、十二日の初月忌に、丸山量阿彌亭にて歌仙を興行したが、その時には、其角去來、曲翠、野童、風國等の名は見えてをるが、支考に關する記録は一つも見當らない。「笈日記」といへども、元來が同記の九月二十九日の條にある如くに、「病中の間(蕉翁の)は晋子が終焉記にくはしければ但よのつねの上はつかにかきもらしぬる事を支考が見聞には記し侍る」とあつて、霜月二十九日までは全く記事に缺けてをる。しかも支考は、この間に何時しか伊勢の山田に歸つてゐたのであつた。私は、「笈日記」によつて十一月三十日に、支考が故翁の七七日の供養をしたことを叙べたい。

○十一月三十日、

此時は伊勢の國にありて我草庵にこの日の供養をまうけ侍る

大練記

葉落て山つきぬれば曉の雲の歸るべきたよりもなく日暮て道遠ければ夜の鶴のうらむべき方もなしされば此叟の宿世いくはく人にかちきりおきける生前の九十日はしらぬ事のくやしさをかなしみ死後の四十九日はかへらぬ事のかなしさをくやむすべての明暮は誰がためにかかなしみ誰がためにかくやめるならむ

支 考

節し〜のおもひや竹に積る雪

支考はかくして愈勢陽山田に寶永辛卯八年まで、十一庵を結ぶことになった。

以上で私が今日叙べたいと思ふところは畢つた。これからは、明けて元祿乙亥八年には、二度美濃山縣に歸省して、遠く武江より、近畿諸州を巡り、それからしては西九州博多まで赴くことになるのである。

—(了)—

動物學者

藤 野 靖

(一)

理科大學生篠田一郎君は、八時に眼を醒すと、冷水摩擦をし、簡単な朝飯をとつてすぐに、勉強に取掛つた。半月餘り續いた天氣は、今日も相變らず暑く、藍を溶いたやうな空からは、ざら〜する光線が庭一杯に降り濺いでゐる。庭の植込みには、蟬が煎りつくやうに鳴いて、その鳴聲を聞くだけでさへも、脂汗が滲み出る。それにも係はらず、篠田君は浴衣一枚で机の前に安座して、讀書を續けてゐた。丁度一段落が済むと、ほつと安心した様に、眼を活字の上から離して、呆然視線を宙に迷はす。

篠田君は、一週間ばかり前に、三崎の臨海實驗所から歸省したのだが、殆んど外出もせず、書齋に籠城してゐる。それと云ふのは、來年提出すべき卒業論文の準備に取掛つたからである。篠田君は清楚な容貌と明快な頭腦の持主で、しかも仲々の勉強家であるが、精力が長く續かないといふ弱点を持つてゐる。それで時々書物から眼を離して呆然するのである。そしてぼんやりすると必ず、空想が湧いてくる。

今も、その安心した、弛緩した心の隅から湧いてくる空想を、篠田君は拂ひ除けやうともせず、兩肘を机の上に立て、その上に滑つこい顎をのせ、じつとその取りとめもない空想に耽り出した。……自分の研

究が大學の教授に認められて、一番で大學を卒業する……洋行して日頃崇敬してゐる和蘭のC博士や、獨逸のG博士や、米國のH博士に直接薰陶を受ける……歸つてから、三崎あたりの海岸に、研究所を建て、研究に没頭する。その研究所は必ず青塗りの洋館でなければならぬ……聽て自分の専門たるべき水母類について、世界の學界を驚倒させるやうな大發見をして博士になる……もう一つ、美しい細君を探さねばならぬ……此處まで空想をひつぱつて來ると、彼はにやにや微笑して、あとを有耶無耶のうちに消して、空想の糸をぶつ切り切つてしまふ。

「馬鹿だな、そんなトントン拍子に行くものか。」

彼は辯解するやうに、態を聲を出して言つてみたが、矢張内心では、この空想は必ず實現させることが出来ると思つてゐた。自分の可成明快な才能と、不斷の努力とは必ず、凡ゆる障礙を打破して、凡ゆる幸福を得ることが出来ると思つてゐた。

「兎に角、俺は動物學者だ。少壯學者だ。」

篠田君はかう言つて、昂然と眉を擧げる。彼は常に自分を少壯學者を以て任じてゐた。そして「少壯」といふ言葉に凡ゆるよい意味を含ませてゐた。若い、潑瀾とした、眉目清秀の青年學者が、雜然と竝んでゐる書籍や標本や顯微鏡裡に埋つて、孜孜として新發見をなさんと努力してゐる雄々しい姿を、心に描くのであつた。この時、後の襖がそつと開いた。(篠田君は如何に暑くても、勉強中は襖を閉めて、外界との交通を遮斷する)誰か來たなどと思ふと、彼は慌て、今まで迷つてゐた視線を急に引戻して、それを活字の上に集注した。軽い衣擦れは、彼に妹なることを直覺せしめた。聽て彼は、彼の顔の横に、豐滿な肉体の接近を淡く感じた。篠田君はこの妹を非常に愛してゐた。それで、かうして妹が傍へ來ると、ぐるりと軀軀からだの向きを變へて、「お

い俊ちゃん。」とでも言つて鉛筆の尻でぐりぐりしてゐる笑靨わくはを、一寸突いてやりたかつたのだが、勉強中にそんなことをするのは、如何にも少壯學者の威嚴を傷けるやうに思つたので、一生懸命勉強してゐる振りをし、妹の方を見向きもしなかつた。

「兄様。珈琲を召し上れな。」

妹の聲が耳元で聞えたときでも、黙つて點頭いたきりだつた。「兄さんはお前とは違つて忙しいんだぞ。仕事が山程もあるんだから。」とでも云ふやうに。事實彼は家の者に、不勉強と見られるのを非常に嫌つた。殊に妹には「兄様は學者だ。」といふことを信じさせて置きたかつた。勿論妹はさう信じて、篠田君を深く敬愛してゐた。

俊子が去ると入り違ひに、一人の學生が入つてきた。足音が大きいので、篠田君は振返つて見た。

「あ、田島君か。暑いな。縁側の方が涼しいから、此方へ來たまへ。」

篠田君の言葉につれて、田島君は机の横まで來て、やゝ肥えた身体を据ゑた。挨拶をして一頻り胸に風を入れ、机上に擴げられた書籍を覗き込んだ。其處には獨逸語の活字がぎつしり詰り、左の頁に寫眞版が一個所挿入してあつた。

「相變らず勉強ですね。僕は休暇になつて、殆んど何もしない。豫定ばかり立て、毎日のらくらしてばかりゐる。」と田島君は感心し乍ら、篠田君を見上げた。田島君は篠田君と、同じ中學を通り、同じ高等學校に學んでゐるので、二人は仲もよく、また互に敬愛も相當にしてゐた。田島君は目下高等學校の文科に籍を置いてゐる。

「いや、進行が遅くて困るよ。もうあと二百頁ばかりあるが、如何しても一週間のうちに片付けねばならな

「いんだ。これを終へれば、すぐ琵琶湖へ行く豫定になつてゐるんだ。」

篠田君はかう言つて、眉の間に前途遠遠といふやうな小皺を寄せて、あとの二百頁をひら／＼捲つてみた。「忙しいんだな。一体何を研究するんです。」

「僕は水母類を研究してゐるのだがね。水母類といへばまあこんな物だ。」と言つて、左の頁の寫真版を示した。田島君が覗いて見ると、白い木の枝の様なものに、矢張白い粒の様なものが無數に附着してゐた。

「これは目下研究してゐるものだ。學名は寫真版の下に書いてあるから、Dendrocoryne Secunda Inaba——Inaba といふのは、日本の稻葉博士が発見したからだ。発見者の名譽を保留するために、人名を加へるのが普通だ。こゝに學者の誇りがある……。」

篠田君は漸々熱して來た。そして頭の中で Shinoda の七字をイタリックに並べてみて、夢見るやうな視線を遠くに投げた。けれども田島君はこれを聞くと、何となく淡い憤慨を感じた。

「それは誇りだらうけれど、一体その人達は何の目的で研究に熱中してゐるんだらうか。換言すれば、假りに君は何の目的で動物を研究してゐるんです。」

篠田君は、この「換言すれば」には少なからず驚いたが、それでも微笑を以て答へた。

「さあ、何の目的といふと困るなあ。實のところ目的などは考へて見たこともない。まあ面白いから研究するんだな。」

「それぢや、まるで遊戯的ぢやないか。」

「遊戯的の言はれても仕方がない。矢張面白いからやる、研究したいから研究する、自分の感情を満足させるために勉強するのよ。」

「それはいけない態度だ。僕はそんな態度でした仕事は無價値だと思ふ。」

「すると、またお得意のトルストイを引つぱり出すのか。」

「さうだよ。兎に角、廣い人類の愛の上に立脚した仕事でなければ、正當で價値あるものとは言はれないと思ふ。人類の目的を目的にした仕事のみが貴いのだ。」

「ところが僕はそんな考へは持てない。只研究そのものが面白いから研究するのだと言ふより仕方がない。これは僕ばかりではなからう。日夜天体を觀測して、寢食を忘れる星學者や、蚤の生殖器の様な取るにも足らぬ微細なもの、研究に、一生を費して惜まぬ生物學者や、兎の白血球の作用の研究に數十年を費した醫學者や、古跡の調査や遺物の斷片の採取に全力を盡す考古學者等に向つて、何故に然る人間に縁遠き研究に従事するか、貴方の目的は何ですかと問うて見たまへ。恐らく彼等は一寸返答に詰るだらう。そして多くの人はわからないと答へるだらう。強ひて言へば、學問的興味を満足させるために研究してゐると答へるだらうと思ふ。」

「だから、科學者の多くは間違つてゐるといふのだ。きつと彼等は破産する。」と田島君もだん／＼熱してきた。

「いや、科學者ばかりぢやないよ。これは君の領分に侵入することになるが——我々が立派な作物を讀む、假にバイロンを讀むと、我々は華々しい熱と力とを與へられる。けれどもそれは決して、バイロンが後世の人に熱や力を與へるために歌つたのではなからう。胸に鬱積した止むに止まれぬ藝術慾が、勃發してあんな絢爛たる文字になつたのだ。もしそれに反して、バイロンが人々に熱や力を與へやうと思つて、筆を取つたとしたならば、私は極力バイロンを攻撃するに躊躇しない。兎に角バイロンの態度も、科學者のあつした態

度も正しいと思ふ。」

「正しくない。」

「まあ聞きたまへ。」と篠田君は落着いて、「エツカといふ偉い動物學者がゐた。エツカは一生の心血を注いで、蛙の解剖書を三冊書いて死んだ。その三冊の解剖書は如何な心持で書いたか、またそれがどれだけ、人類のためになつたかは知らんさ。けれども、恐らく、エツカは蛙の解剖書を完成したと云ふことに、大きな満足を得たに違ひないことは、想像ができる。僕はエツカなどのことを思ふと、涙ぐましくなる。」

「要するに、あなたはデレツタントだ。」

「さうだ。僕はデレツタントといはれてもよい。」と篠田君は心の中で呟いた。「けれども、僕は僕で何處までも正しい。」

「もうこの邊で、議論終結としやうね。議論をすると、益々暑くなる。」

篠田君はかう言つて、胸の汗を拭いた。

「ほんとに暑いな。」と田島君も笑つて、扇を動かした。

(二)

二人は共に晝食を済ますと、連立つて堀田氏を訪ねることにした。堀田氏と云ふのは、二人の先輩で、今は當地の某官衙に勤めてゐる。

狭い門内を横切つて、がらがらと戸を開けると、玄關の後が直ぐ座敷である。見れば簀の子の衝立を通し

て、堀田氏が晝寝をしてゐるのが見える。二人は顔を見合せて、一寸微笑し、篠田君は大聲で、案内を乞うた。すると堀田氏は、微かな呻聲を發したが、聽て驚いた様に、機械人形の如く飛起きて、玄關へ出て來た。

「やあ、君達か。あがりたまへ。」と堀田氏は、まだ眠さうな聲を出して言つた。

家の中へ入ると、一入暑さを増した。二人は挨拶もそこ／＼に縁側に立つて、汗を拭いた。堀田氏も、寝汗をかいた毛むくぢやらの胸を開けて、極彩色の美人畫の扇で、ばた／＼と風を入れた。其處へ奥さんが出て來たので、二人は慌て、坐つて挨拶をした。奥さんの後から、今年五つの幸ちゃんも跟いで來て、挨拶をしてゐる奥さんの肩や頭に擱る。奥さんは、その手を外して、

「何ですわね。この暑いのに、そんなことするものぢやありません。さあ早くお客様に、お辭儀をなさい。」と優しく叱ると、幸ちゃんは即座に、バタリと音を立て、疊に手をつき、一寸頭を下げた。

「幸ちゃん今日は。」と篠田君はお辭儀を返して、「幸ちゃんも大きくなりましたね。」と言つた。その言い振りが、我乍ら老人染みてゐたので、篠田君は獨りで苦笑した。

話は四人の口から、交る交る出て絶えなかつた。何時歸省したかとか、學校の様子は如何とか、東京の景氣は如何とか、物價が高くて困るとか——こんな話が、主として語られた。そして話は主に、堀田氏と篠田君の間に語られて、奥さんと田島君は、時々横から口を挟むのであつた。しかし篠田君も田島君も、この會話からは、最早ほとんど興味を得ることは出來なかつた。堀田氏との間には、もう越え難き年齢の溝が出來たと、二人は思つた。そして勉強も何もしないらしい、堀田氏の安易な生活を、竊かに輕蔑した。

平凡ながら、會話は笑聲を交へて進んで行つたにも係らず、東京の話の序でに、堀田氏が

「私も東京へ行きたいなア。」と言つたのを一段落として、ばつたり話は切れてしまつた。四人は可成狼狽

して、話の糸口を探し始めた。けれども、どうしても引出すことが出来なかつた。また微かな糸口を探しあつても、何だか喉がひつついた様で、聲が出なかつた。もし、強ひて破つて聲を出すならば、その聲はトンネルの中で叫喚いた聲の様に、四人の耳を激しく震動させる様に思はれた。

どうすることも出来ない様な静寂が、室内に瀰漫した。蒸せる様な、眠い様な空氣が、一様に充ちて動かなくなつた。只四人の動かす扇が、白い蝶々みたいに、微かな波動を起させた。四人は諦めたといふ風に、すつかり緊張を緩めて了つた。眠さが、四人の眼に漂ひ始めた。狭ひ庭から来る、強い反射が、四人の眼を更に細くした。土縁の柱に、一匹の蟬が止つて、喧しく鳴き出した。其處へ幸ちやんが、裏口から廻つて来て、そつと蟬に近づいた。そして、小さな掌を彎曲させて、蟬の上から被せやうとした時、蟬はばた／＼と飛び去つた。すると幸ちやんが、「しまつた！」とませた口を利いて、滑稽けた顔をして見せたので、四人の顔面筋肉はあはや收縮しやうとし、腹の底から押へたやうな笑聲がこみあげやうとした。

この時である。堀田氏の庭と垣一重隔てた裏の家に、急に裂けるやうな叫聲が、この沈黙を破つて起つた。

「水!! 水!! 早く水を持つてきて!!」

四人は愕然とした。顔面筋肉の收縮もびたり止り、笑聲も喉で止つた。四人は互に顔を見合しす。四人の表情には、それぞれ恐怖とも心配ともつかぬ緊張を表してゐた。四人の等しく直感したことは、「火事」であつた。けれども、四人の表情の裏に隠された感情は、皆違つてゐた。奥さんは只恐怖を感じた。堀田氏は直ちに、自分の財産の上に加へられる損害を心配した。そして敏捷に風の方向と、兩家の距離とを目測した。篠田君は事件に對する興味を感じた。眞晝間、家を焼く薄ぼんやりした焰の色を思ひ浮べた。四邊が急に騒しくなつて、目まぐるしい活動を現出する修羅場を想像した。彼は恐怖に壓迫されるのを反撥しやうとする

興味の躍動に、心をわく／＼させた。田島君も無論、一寸興味を感じたが、それは自分の身が安全なるが故に感ずることを思つて、痛く自分自身を批難した。そして、心配しながら事件の成行を凝視した。

「水!! 水!!」といふ女の叫聲とともに、裏の家では、一頻り、人のばた／＼と走る音、バケツのがちやがちやいふ音が、混がらがつて起つたが、何處からも煙は出ず、どうも火事らしくはなかつた。そのうち、また女の叫聲が聞えた。

「よつちゃんよう——。よつちゃんよう——。」

その聲は涙の交つた、おろ／＼した、そして喉も張り裂けるばかり絞り出した、聲であつた。この聲を聞く四人は微かな嘆息をして、安心と失望とを交へた様な、不思議な表情をした。しかしそれは一瞬間であつて、奥さんと、篠田君と、田島君の顔には、更に濃い不安の影がさした。堀田氏のみは、すつかり安心してしまつた。

「貴方。村田の芳ちやんが、わるくなつたのですよ。氣絶でもしたんでせうか。」と奥さんが、堀田氏の顔を覗き込み乍ら言ふと、堀田氏はそれには答へずに、

「まあ、火事ではなくて仕合せだつた。」と言つて、卑怯さうにも小さく笑つた。

三人は明かに憤慨の表情を表した。そして何とも言はなかつた。座が何となく白けた。

「芳ちゃんよう。芳ちゃんよう——。」といふ哀れな一生懸命の叫喚は、今は二人三人の口から交る／＼叫ばれるらしい。奥さんは見兼ねて、

「貴方。わたし一寸行つて参りませうか。」

「なに。子供の事だから、すぐよくなるだらう。とに角、火事ではなくて仕合せだつた。」

堀田氏が取り合はないので、奥さんはまた黙つて了つた。

「芳ちゃん、芳ちゃん。母さんは此處にゐるよ。母さんの顔がわからないかい。」と裏の女の聲は、大層落着いてきた。「お前たち、すぐお父さんの所と、お医者へ電話を掛けて、早く来て下さいと言つておくれ。」と凜とした聲で、命令した。すぐ鈴が鳴り出したり、戸をあける音がしたりした。田島君はもう堪らないと云ふ風に言つた。

「大丈夫でせうか。行つてあげたら如何です。」

「もう醫者が来るから大丈夫だらう。何しろ火事でなくてよかつた。この物價の高いに、家まで焼かれちゃ大變だからね。」と堀田氏は矢張り取合はない。

田島君は今度はすつかり憤慨して、顔を赤くして、口を噤んだ。「火事々々つて、火事がそんなに恐いのか。こんな汚い家を焼かれたつて何だ。人の命を大切とは思はないか。否人の命の大切なることは知つてゐるだらう。しかし、それは自分の命と、奥さんと幸ちゃんの命だけが大切なのだ。もし幸ちゃんが、あんなになつたら、どんなに醜く騒ぐだらう。唾棄すべき個人主義者!!」と心の中で呟いて、憎悪した。

篠田君も憤慨し、失望した。篠田君は、火事のことはずつかり忘れてゐたけれど、「事件」の期待は、矢張心の底に蠢いてゐた。彼は裏の家の事件が、此家まで波及するのを待つてゐた——堀田氏が驚く、戸棚からウイスキーを取り出して、それを持つて裏口から馳せ付ける、奥さんも馳せつける、それから二人も飛びこむ、一人の美しい少女(芳ちゃん)はきつと美しいと定めてしまつてゐた)を中心として、これ等の人間が、甘い人情の涙にかき暮れながら、躍りつゝ人間性の交響樂シンフォニーを奏でる——といふやうな樂劇的な場景メロドラマチックシーンを期待してゐた。けれども、何時迄待つてゐても、堀田氏は達磨みたいに澄してゐた。彼はこの實際的に固まつた、感じの鈍

い、木偶の様な堀田氏を、すつかり輕蔑した。

篠田君と田島君とは、ちらと眼を見合して、腰を浮した。二人はもう、この場にゐるに堪へなかつた。彼等は堀田氏の引止めるのも聞かずに、歸つた。

まだ暑い日盛りを、二人は別々に興奮しながら、黙つて家路に就いた。

【三】

翌日も、矢張紺碧の空と、地から湧く様な暑さが續いた。八時頃眼を醒したときには、もう昨日の事件は、夢の様に隔り、あの興奮もケロリと忘れてゐた。篠田君は常時の通り、延々とした心地で、机に向つた。そこへ、田島君があたふたとやつて來た。

「大變なことになつたよ。芳ちゃんが到頭死んだよ。」かう言つて田島君は、昨日の事件の續きを報告した。それに依れば、芳ちゃんは、醫者の手當と注射で、一時は正氣づいたが、夕暮の七時頃からまた悪くなり、到頭心臟麻痺を起して、夜の二時に死んださうだ。芳ちゃんは今年七つで、時々ひきつける癩があつたが、すぐ癒る位輕微なものであつた。昨日は姉弟達と仲よく遊んでゐるうち、ばたりと倒れた。しかし常とはやゝ重症だつたのと、手當が遅れたので、遂に死んで了つたのださうだ。

「僕は何だか心配で、今朝堀田さんへ行つて、奥さんから聞いて來たんだ。奥さんは泣いてゐたよ。」かう附け加へて、田島君は更に、堀田氏の昨日の態度を罵つた。もしウイスキーでも持つて、早く馳せ付けたら助かつたかも知れぬと、頻りに残念がつた。

篠田君はこれを聞くと、直ぐ昨日の興奮まで引戻された。

「可哀さうなことをしたね。せめて二人して、葬式に参つてやらうぢやないか。」
田島君は勿論賛成した。

その翌日の午後四時、篠田君と田島君とは、まだ一面識もない芳ちやんのために、棺の後から従いで行つた。多勢の會葬者の中には、堀田氏が、絹の羽織に、仙台平の袴をはいて、体裁のよい挨拶を交し乍ら、白い扇をひら／＼させて行くのが見えた。

芳ちやんの柩は小さい柩であつた。その小さい柩が人々の前を通ると、人々は静かに垂頂れた。中には聲をあげて泣きだした女の子もあつた。恐らく芳ちやんの生前の「お友達」だつたのだらう。

道は眞白に燥いて、ときどき砂塵が、かすかに柩の周囲を包んだ。それが一層痛ましく悲しく見えた。

二人も、胸の中へ、はら／＼と涙を流し乍ら、歩いて行つた。田島君は、失はれた小さき生命を痛みながら、死んだ戀人を悲しむやうな敬虔さを以て、つゝましく涙を流した。しかし篠田君は、「芳ちやん」といふものから抽象された、哀れな美しい少女と、「堀田氏」といふものから抽象された、實際的な利己的な大人との間に立つ傀儡として、「リア王」に出る道化役者のやうに、甘い人情的の涙をはら／＼と流しながら、爛々と狂ふ眞夏の太陽の下を、躍るやうな足どりで、歩いて行くのであつた。

(七年十一月作)

青と銀との嘆

あくがれ心の甘さもて、夢見心地の懐しさもて、

童話の世界を暮ふ人々に捧ぐ

北村 喜八

行つても行つても際涯なかつた。森はますます深まる許りで、いつ、この森をぬけ去ることができぬのかめあてがつかなくなつた。

(おや、みちをまちがへたのかしら?)

慍う思つた刹那、日の暮れるのを恐れながら、しきりと急いでいたころに、寂しさと恐ろしさが、同時に頭を擡げてきた。そして、その感情がみるみる中に擴つて聽て、心をすつかりと俘虜にしてしまふ。

(日がくれるのだ、この淋しい森の中で)

かうした思ひは、この淋しさと恐ろしさとの感情を煽りたて、眸をぬらす泪にまで變へてしまつた。弱い子供の様な心で、不思議にまで流れる泪に咽んだ。そして、ふと、顔をあげると、まあ、何といふ事だらう、私の前の方に、今が今まで、ながながとついでにゐたと思つたみちは、跡もなく消えうせて、白い幹が、お

し黙つて立つてゐるのみだ。ハツと思つて、私は後をむいた。横をむいた。併し、私の周囲をとりまくものは、徒に無音の白い幹のかす多くにすぎなかつた。路傍に咲く草花を折りとつて、そつと、そのかをかいのみたり、軟い花びらをちぎりどつては、ふつと吹きとばしたり、みづみづしい葉をば、指の間ですりつぶして、その葉緑素の淡い緑色をなつかしんだりして、氣輕に、上きげんに、たまには、ひとりで口にする小唄をうたつたりして歩いたあの道が、ほんの一刹那のうちに見えなくなり、深い森の中の樹の間に、天からすてられた嬰兒の様に座つてゐるのを、いぶかり、かへりみぬ譯にはゆかなかつた。途方にくれ、不思議だと思つて、再び、あたりをみまはした。

日がくれるらしい。靜かに、寂しく、青い靄が烟る様に、木立の間を這ひまはつて、薄明りの中へ、黒水晶の様な眼を持つた夜を誘つてくる。今まで、明い光の中にゐた丈に、それが一層淋しい感じをあたへる。……いつてもいつても果てない様な青い空から、陽光は、力とめぐみとをこめて降つてゐた。生き、伸びる力をはぐくまれてゐる凡ては、その中で、思ひ切つてうれしさうに踊つた。葉一まい、草一本も、生きる力を空しくしまいとして、はち切る様な生活意識と、泪ぐましい程に深い自己愛憫のこゝろとで、深い蒼穹へ伸びていつた。葉の細い纖維が光を透してみえるといふ事も、葉緑素が空中へおくる軽い爽かな香も、すつかり、私の心を有頂天にさせた。そして、私は、かくあるべしとさだめられた嚴かな運命の相の寂しさを、すこしも知らない子供の様に、ついさつきまで、いゝや、今の今まで歩いてゐたのだ。それなのに――

闇は次第に、寔音しづかに私をとりまく。
(夜の來るのは金輪際いやです、いやです)

憊う言つて、私は、だいつこをこねる赤子の様に、而も心から祈る様なつつましい氣持で、空にむかつて

言つた。

あたへられ、めぐまれたやすらかないこひの夜をなせに今日は憊うまでいやがるのであらうか。貧しいお祈りと共に、一日の疲れをいやさうとて、灯の靜かにゆれる寢室のベットへもぐりこむ時の感謝にみちた心を、今日はなせに憊うまで拒まうとするのか。何故か分らない。併し、夜の來る事が無精に怖かつた。

靄は、あのみ空に惜げもなく銀いろの星を鏤めるために、木の葉や草の葉の面に冷い刺戟劑をあたへるために、木の肌にしはしの間銀ねずみいろの衣を貸すために、凡てのものに軟いしめつたくちつけをなげかけでは走りまはる。そして、私のうるんだ眸に、途方にくるゝ心に、つめたい手の先、肢の先に、ひんやりとくちつけしてゆく。そして、それが、魔法の國の神祕な靈氣の様に、いつか、私を夢幻の世界にまでひきずりこむ様だ……。

ほんどに夜が怖いなら
 そんなに夜が怖いなら

永久に輝く巨大なランプに
 雨の神、風の神を使とし、
 油をみつぐがい、
 油を、油を。

こんな唄が、私の頭に靜かにひびく。
 そして、私の神経は意識は、いつかねむり心の甘さの中にとけゆく様だ。……

不圖、私は耳もとで、かすかなメロデーをきいた。それは、初めは殆んどぎぎとれるかそれぬ位であつたが、しだいにはつきりとしてきた。ヴァイオリンのかほそい絃のすゝりなきの様な、人のこゝろの底のそこまでしみわたる響であつた。ねむり薬でねむつた意識が、しだいとさめてくる時の様な私の意識は、そのメロデーを耳にするにつれて、透明になつてきた。何思はず耳をすませば、その音は懐しい追憶を織りこんだ子守唄の様に甘くも、運命に虐げられた悲しいのちのすゝりなきの様に淋しくも響いた。

私の眼はパツと開かれた。

と、今までのひびきは、湧き出づる泉のそれであつた。

泉は 心にくい程清冽に底しれぬ奥から湧きあがつてこぼれる。其處は美しい木立の間で、樹は、静かに美しくその陰影を落いて、水の色をいやが上にも青くしてゐる。數人の人々は、水くむために、そのほとりに集つてゐる。南國とみえて、皆、裸体で、只、腰のほとりに紗をまいてゐるのみだ。一人の老人は、その骨だらけの皺多い、肌のいろつやの悪いからだを曲げて、甕に水をみたさうとしてゐる。若者ははぢ切る様な若さを現した豊かな肉体で、水一杯の甕をかかると肩にしてゐる。はにかみを隠した少女は老人の汲み終へるのを待つてゐる。凡ては静謐で、平安であつた。何處かで小鳥のないてゐる様な氣がする。木立の間から覗かれる青い空は神祕なほひをたいよはしてゐる。

私は、しばらく、睨とみいつた。

すると、其の實物大の人々が、見るみる中に、三四寸の大きさにまで縮小されてしまつた。おやと、駭くまもなく、それは、私のすぐ眼の前にある額の繪にすぎなかつたのだ。シャヅンヌか誰かの繪であらう、額は事もなげに縁がつた灰色の壁にかゝつてゐる。

みれば、私も、何時の間にか、あの行き惱んだ森の中から、この見事な部屋の中につれてこられてゐる。身もしづむ許りの厚い柔い蒲團の中に、知らぬ間に眠つてゐるのであつた。部屋の隅の小さい卓の上には消えようとして燃え、消えようとして燃ゆる蠟燭の神祕な光が、亞刺比亞の何處かできたと思はれる唐草模様美しい敷物の上に、仄白く流れ、その傍の薔薇の花は、崩れる許りに咲き誇つてゐた。窓の外は、いい星月夜で、明滅の星は煌々と青く、ながながと並木の一行が薄ぐろく立ちならんでゐる。

(たれか、どうして、私を、ここに)

恚う思つた時、こゝは魔法使のお婆さんの家で、今にも魔法のつるで打ちたゞかれて蛙にでもされた氣がした。或は、こゝは王城の一室で、金銀ちりばめた王冠いたゞいた王が皇后様や従者引きつれて現れて、この私に、王様の位をゆづると言つて、あの寶石鑲めた王冠を私の頭に乘せはしまいか。恚う思つた時に、いっつもいゝかげんの空想を嗤はずにはをられなかつた。

何故かしらぬが、起きあがる氣もなく、私は其のベットに臥した儘で、卓の上に蠟燭の光で奇妙な陰影を落してゐる薔薇を睨とながめてゐる。灯がゆらぐ度に、その陰影もふるへる。と、突然、蠟燭の光は風もなく消えた。すると、それが合圖であつたかの様に、青白い月が窓から覗きこんできた。そして、何處か古典的の美のある敷物の上に、又、私の白い寢床の上流れ、私の眼にしみ入る様にさしこむと、さつきの泉の湧きでる光景が、額の繪の大きから自然大にまで、忽ち擴大されて眼の前に浮ぶ。摩訶不可思議と、我と我がめを擦つても、そのシーンは一層はつきりとしてくる許りだ。

そこにはやはり月が美しく輝いてゐた。そして怪奇で清麗で何とも言へぬ詩的な森の泉のほとりであつた。凡てを夢幻的な氣分にまで誘ふ様な夜霧は、しつとりと深く漾うてゐた。甘い芳醇な酒の様な月光は、その

霧で遮られて、霧ともつれ、軟い感じを伴ひながら、地上へ青と銀とを播きちらした。絶えまなく湧きでる水は、月光で輝いて、サファイヤやダイヤをあつめよせて、ゆりうごかす様であつた。さつきの老人は水くみ終へた。そして、若い處女がその甕をみたすために跪いた。内を流れる真赤な血がうす赤く染めた皮膚へ、光は青く流れて、丁度、眞珠か、貝殻を月光ですかしてみる様な色だつた。水は傾けられた甕の中へ水銀の様に流れはいつた。少女は、聽て、その甕をとりあげる。甕は水で濡れ、水は月光で輝いて、寶石を鏤めた様だ。乙女はそれを運びさるために肩へのせる——しかし、重すぎて、水はさつと傾きかけた甕から零れる。まるで、月草でそめあげたダイヤの粒をこぼす様だ。乙女は肩からそつとおろす。水はしばらく甕の中で小さく波紋をつくつてゐたが、すぐのんどりとする。

青甕の中にもられた

ナルドの香油よりも香高き

しろかねいろの膏ゆる

慇う乙女は唄ふ様な氣がする。

魔法使のお婆さんの

魔法の杖にはめられし

猫眼石よりよりくしき

光放てる青甕に

そつとくちつけしてみれば

うらぶれはてし愛のため

なきくづれたる涙より
もつとつめたく——

と若い男は水くみながら唄ふ。

愛は炎

沈淪をしらぬよろこびに

哀愁をしらぬたのしみに

若きころをやく炎

遍歴の旅さびしけれど

愛はしづかに心なぐさめ

いのち愛しく貴かれ

と一人は唄ふ。

やがて、水くみ終へては、木肌の鏤銀にかたく木の間、甕肩にしては消えゆく。

あとには、こぼれた水が青い青い芝生の上で、銀の帯の様に映える。

と、水くむ人の凡て去つた後の静謐さの中で、水は空高く噴水の様に、わきあがつた。紺青の絹張りの大

穹へ小さい銀粒は踊り狂つてのぼる、月はその一滴一滴にも微かなかげを宿いて、煌々とする。

それは、青い青い夜のけしきである。

青いいろが何よりもいゝいろだといふ事を青みづからがしめすために、青自らがつくつた様なけしきだ。

そして、その中で、銀いろはふるへながら嘆く。

運命の相すがたの淋しさに
なきながら祈る心に
さちあれよ

ひとりなる祈りに

こころよりながるなみだよ

寶石たまよりもめでたかれ

地を嗣ぐものは

こころやさし

神みるものは

こころたゞし

貧しきこころや

まことのこころの

よきねがいをば

しりぞくるものよわざはひなれ

唄はしづかに水のひゞきと共にひゞく。

しろがねいろの水玉は地から穹、穹から地と、月光の中でおどる。その一滴が、すつと、私の襟首から流れ入る様な気がした。はつとしたその刹那、凡ては消えて私はやつぱり、もとの森の中に寂しく座つてゐるに過ぎなかつた。さては、今までののは、凡て夢であつたのかと思つた。森の中では日はいつか暮れて、夜は

青い月夜であつた。月の光は、今の泉を照すよりももつとも静かに輝いて、夜露でぬれた木の葉はその光で泪してゐる。

今、襟首にひんやりと冷たく流れたのは、葉末に宿つた夜露にすぎなかつた。

一体、どこまでが現實で、どこまでが夢なのか。

私はぼんやりとしてきた。すると、今ゐる森も、夢でないかといふ氣がして來た。……………

(一九一九、三、五)

終日行軍記事

二月十四日、午前八時集合。

寝に就く時一寸氣遣はれた天氣は、起き出た頃には最早世界を雨に包んでゐた。整列を終つて雨の中に出發したのは八時四十分である。兩軍は犀川の大橋で別れる。私は防禦軍となつた一年中隊について泉町から西に折れた。野々市驛の踏切を通り、消え残る雪の田路を傳うて、十時半頃、下福増に着く。

南軍(白帽軍)想定 一年生

一、南軍ハ金澤市ヲ占領スル目的ヲ以テ北陸道ヲ北進シ二月十四日午後二時頃ニハ松任町附近ニ到着シ得ル豫定ナリ

二、南軍學生中隊(機關銃一小隊附屬)ハ軍ノ主力ニ先行シ安原村附近ニ陣地ヲ占領シ金石方向ヨリ南進スル敵ヲ防禦シ主力ノ來着ヲ待ツベキ任務ヲ受ケ午前十一時其先頭ヲ以テ下福増南端ニ達ス

此ノ時迄ニ得タル情報左ノ如シ

一、歩兵約二個中隊ノ兵力ヲ有スル敵ハ金石方向ヨリ南進シ午前十一時頃ニハ犀川ヲ通過シ得ルノ距離ニアリ尙敵ノ後續部隊ハ午後二時頃ニハ野々市附近ニ到着シ

得ルノ距離ニアリ

二、北陸道上野々市附近ニハ我軍ヨリ別ニ歩騎兵ノ一部隊ヲ前遣シアリ

十一時、第一第二小隊散開。家外れの田の畔に北面する。雨は此の頃益々猛烈に降り出して、百米も離れては散兵線も朧ろしか見えぬ位の霧である。睫毛の先に球数のやうな霏が二面にぶら下つて、不思議にもそれが隙の開閉に隨つて搖盪する。左手にはや、荒れ氣味の日本海がどんどんと響いてくる。

待つても待つても敵は仲々來なかつた。皆は實際辨かしがつた。そして春になつたといふものゝ、それもまだ層の上だけであるのに、かう石地蔵のやうに、頭から降り籠められては堪らないと思つた。それでも元氣のいい兵隊さんは、薄つた畦を握れ乍ら、割れるやうな聲で何やら嗚鳴つてゐた。

敵の影が霧の中に現はれたのは十二時十分前であつた。そして、何故我軍が一時間も先から散開してゐたかといふ理由はその時解つた。それは極く簡單で、要するに敵方が途中の道を間違つた爲めといふのらしい。

霧の中に敵が現はれて、霧の中で射撃して、霧のうちに戦が終つたのはそれから間もなくである。裏まで雨の透つたマントを頭から被つて皆と一緒にとある民家に休憩した時は、それこそ寒さに凍る程であつた。ゲートルを越え、ズボンを通つて滲み込んだ雨水は、瘦犬が食にありついたりやうに兩脛に喰ひ付いてそこにある血といふ血を残らず吸ひ盡して失つたかのやうな感じがあつた。冷え切つて感ぜぬない程は、他人の重荷よりも猶厄介であつた。霧は其の頃漸く霽れかけてゐた。

小降りになつた雨の中に整列して歸り路に ついたのは一時少し前であつた。(各務)

北辰會各部々報

柔道部

南下記事

男子學生の力を致し四高に入りてよりも長きは三年短きは九十日花が咲かうが葉が散ら

うが特に九月以後は學課も棒に振つて練習をしたが未だ物足らぬ様な感の無いでは無い、廿四日午後十時多數先生や校友やに見送られて他部選手と共に第五回目の南下の途に就いた、師走の空は晴れたれど先は雨が嵐か、易水塘畔に於ける壯士の悲壯なる覺悟を胸底に懐く選手は黙々として一人としてはいしやくものは無い、常ならば鬱積せる胸の開くべき試験の終れる日にあるものをとそぞろあはれなり、廿五日朝多數の先輩大學柔道部委員やに出迎へられて京都帝國大學病院正門前の金澤館に入る。

朝食後直ちに選手が總て個人的行動をとるを禁ず、散歩なんかはやりもしなかつたが、湯に入るでもすべて團体的にやり萬巴む無き時はマネージャーに申出づる事になしたり、其の理由は自ら明なるべし。

午前十時より大學道場に於て練習す其の後先輩に由る南下軍歡迎會に列す場所は大學學生集會所本日の練習に於て初段横山怪我す、全治迄數日を要すと神痛甚だし、

廿六日 午前十二時より二時迄大學道場に於て練習す、二時より京大柔道部主催にかゝる歡迎會に列す、寫眞を撮る、今日選手寺尾

○紅(四高)

白(山口高商)

大將 二段阪田

大將 二段阿部

副將 後藤

副將 水越(上四方)

參將 加藤

參將 河野

二段 大後

和田

二段 田原

二段 平野

二段 中内

中垣

宮内

末延

(巴業) 初段 稻垣

舟木

中川

北條

笠原

神崎

竹村

島田

吉竹

川崎

宮崎

長嶺

川村

佐藤

井浦

岩田

兎に角二高で名を馳せた小田を師に聘した

山商が何を爲すかと餘りに要心なしたるため引分に次ぐに引分、而も其の多くは彼等山商選手の武道を治むるもの敢てせざるが如き卑劣なる逃方に由りて引分けたるもの結局彼等は立業も寝業も更に治め得て、得たるものは唯卑怯なる逃方のみなるらし。

○井浦——岩田 吾軍の先鋒井浦寢て先づ敵の寢業の程を試さむとす然も彼れ終始逃ぐ井浦追詰め引き込まむとす事數次終に引分。

○川村——佐藤 川村立ちて敵狀を斥る彼も始め立ちしかども敵せずと思ひけむ寢て防ぐ川村銳意攻めたれども未だ押込に入らずして八分は過ぐ。

○宮崎——長嶺 睨み合ふ事數分にして組む互に首を曲げて敵の虚を衝かむとす、而も偵察戰にして引分く。

○吉竹——川崎 川崎吉竹を見て畏をやなしけむ、彼等の根據地の一隅に退きて出でず吉竹突撃して彼を押へ、たまたま失して彼上に乗るや唯馬乗になりたる儘施す術を知らず、これ山商の實力にして其の無能なる事敵ながら齒かゆし。

○竹村——島田 竹村敵の虚を衝いてたはず直ちに押込に入らんとすれば彼足で搦む、絞

に入らむとすれば立ちて胴搦をせんとす、其の試合の汚き加減概れかくの如し。

○笠原——神崎 笠原髪蓬々として鐘鬼の出現の如し然も彼の技も亦神に入る神崎其の技に僻易して例の隅に籠りたるまま出でず、笠原突進して組んづほぐれつ疊の外に出づ然も未だ好期を得ざるに時は経過す。

○中川——北條 敵は戰場往來の古強者、吾は新進銳銳の若武者互に鎧を削り組んづほぐれつする様勇ましなんぞ言ふべからざるものなりしが終に無勝負。

○稻垣——舟木 舟木は北條と共に敵の中堅吾聞く前に小田の山口高商にあるや攻むるものと守るものとを定め、其の練習中においても攻むるものは攻撃のみ守るものは防禦のみを練習せしめたりしか、蓋し舟木は攻撃者の部類か、彼は汚き山口軍にありては不思議に宜く戦ひたり、これに對する吾軍の稻垣もより望むところとなり下になり立てば投げ押へれば跳れ返す手に汗を握らしめたるがこれも終に引分く。

○宮内——末延 末延体軀怪偉髪長くして逆に立つ、吾軍の宮内の小なるを見て、未だ其の全身これ鐵筋なるを知らず、彼驕慢の態見

ゆ、宮内敵の懐に飛び込むで足を持つて倒し四方に押へ込むで壓せば千斤の重あり、末延周章狼狽渾身の力を振つて掻く機勢に宮内握つた手を離しけん彼僅に逃れて後亦近寄り逃げまはつて定刻を過す。

○中内——中垣 赫々たる武名を以て敵を威壓し戦を交へて仇を屈服せしむるはこれ戦の最上策なるべきも、この勝負敵を斬つて馬首に飾らずんば亦進むを得ず、中垣我中内將軍を見て十分の畏をなす中内敵を追ふ事益々急なり、彼中垣は卑怯にも中立地帯に逃れて危

を脱す、觀衆眉を顰め其の汚きを笑へど彼は終に出でずして心密かに曰く、吾引分くる事だに得ば女衣を着て猶衆座に出づるも辭せんや。

○田原——平野 田原名は剛肥後熊本の産なり、体軀小なれども技絶妙攻むるに急がず守りて怯ならず、今日平野を攻むるや右膝頭を以て敵を壓して立たしめず、平野流石腕に覺の老將軍田原を支へて亦押込に入らしめず、終に引分く。

○大後——和田 己を知り敵を知るものは勝つ、と和田敵を知り己を知る事深く、始めより大後を避けて近寄らず、大後が手を出す一歩

を運べば彼頭を締め脊を丸め後をも見て劍道場に逃げこむ、審判官の中への聲で誰々柔道場の端に來り、大後が進めば亦逃げて出でず、蓋し彼は所謂守る方の部で一意専心去年の南下以來ランニングの練習をやり以て今日に備へたるものなるべし、審判官終に「以後柔道場以外に飛び出す者を戦の意志なきものとし除名する事あるべしと言ふ條文に照して、オミットすべし」と宣言せらる、然も彼和田終に定刻を逃げ得て大後と引分け其の目的を達したるはこれ作戦上の勝利を得たるもの、彼亦一流の兵法家か。

○加藤——河野 三十六計逃ぐるに如かず、とは山商軍が金科玉條として拳々服膺以て其の違はん事あるを恐れたる所なるが、今や柔道場外に高飛びする事は禁ぜられたれば彼等に困却の色あり然れども残るは唯阿部水越河野の三人に逃ぐる部のものは唯河野一人なるべければ如何にかして引分んものと道場内を走る、加藤漸く捕へて之れを投げんとすれども河野も亦名だたる柔道家なり、腰を下して守れば加藤易くは扱ひ得ず然らばこれを倒してこれを押へ或は逆に入らむとせし事しばかりしも惜じや引分に終る。

○後藤——水越 今や十三組の試合全部引分に終り、勝敗は残る副將大將の二組に於て決せざるべからず、山口高商の望を双肩に擔ひて立ちたる水越初段体軀長大、肩幅廣く風手堂堂將に三軍を叱咤すべき將帥、山商の實力の大將なり、山商今日の作戦は如何なが手段を弄するもいさばで水越を以て阪田と引き分せしめむとしたるが如し亦彼水越自身も後藤をば眼中に置かずこれを一袖のもとに跳れこばして大將に迫らんとするの意氣其の傲慢なる態度に見せたり、然も彼は吾後藤の神技を知らず無二無三に攻め來り物の十分たに立たざるにはや疲勞の態見えたり、花が咲くも葉が散るも、雨の日も風の日も倦まず撓まず練磨せる功能は空しからで後藤得たりと猛然として敵を上四方に封じ込めば流石の水越貧乏搖だになし得て果敢なく敗れ終んぬ、彼や唯己の力をたのみて敵の力をはからず、敗れたるは當然の事ながら亦山商の胸中を思ひて一擲の涙無きにあらず。

○後藤——阿部 頼みにしたる水越に果敢無く陣殺せられ老將阿部錦の直衣掻ひ繕ひ老後の思出と勇を振つて馳せ向へども兎角足下しごるもごるにて定まらず、後藤手枕をして嘯

く、阿部施すに術無く「立つて來い」と叫ぶ、後藤「寝て來い」と返す、阿部死者狂に武者振着くも後藤ちつとも感ぜず、時に手を出して押へんこの氣勢を示せば阿部泡險つて逃げ出す樂々と廿五分は経過して引分く。かくして我軍は大將阪田不戦にて山口を屠り、山の態度實にあき足らざるものありしも、彼終に優者たるを得ざるものなるべければこれを強く責むるの要なからむ、本日午後六高四人殘して五高に勝つ。○明くれば廿八日落陽の空宜く晴れ氣寒し。今朝あるへかりし六高對山商の試合は山の棄權に由りて六高二勝者なる、ために吾等は六高の眞の技倆を計り得ざりしは残念なりき、然らば吾等は五高に對する経過に由り六高の技を推せん午後一時部歌を高唱しつ武徳殿に向ふ。

(四高)

(五高)

大將二段阪田

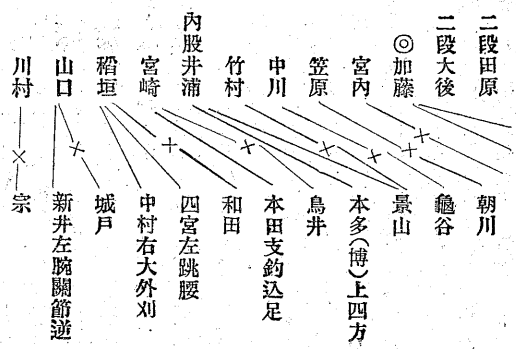
副將後藤

二段中内

大將中内

副將竹村

荒卷



かくて吾軍は五高を粉砕して静々々宿に引あげたり、左に短評を加ふれば。

○川村——宗 人は直感的に最初の勝負を見て全体の勝敗をトセむとすされば先登の勝敗の全軍の志氣に及ぼすや偉大なるものあり、兩者互に相重して軽々しくは動かさず、然も吾等は此の日は先輩より總攻撃をなすべしとの命を受け居れり、果てしも無しと川村進めば敵も亦悪卑もせて迎へ討つ、川村大外刈を以て

肉迫したるも宗亦よく避け引分に終る。

○山口——新井 山口初陣なり、新居を引いて倒れぬと見る間に已に敵の左腕の逆に入

る、新居頑強にして参らず、吾應援隊は折れつゝ折つちまへつゝと底力の籠れる聲で激勵す、山口素より性仁慈なるも今この手を放さば宋讓の仁と笑はれむ、團体の勝敗のため、可愛想ながら彼を屠つて軍の門出の血祭にせむと腕を逆に戻せば關節ミリミリと破れて腕は

だらりきたれぬ、新居今はこれ迄とや思ひひむ始めて悲痛なる聲にて負つたと言ふ、彼や敗れたりと雖も其の氣や壯、以てよくこの南下柔道試合の精神の眞髓を具体的に表し呉れたるをひそかに感謝す。

○山口——城戸 城戸腰を下げ首を垂れて一意引分に出てむと守る事八分終に其の目的を遂げたり。

○稻垣——中村 中村体長大立つて来る、稻垣其の襟に觸はるを見る間に中村は其の右大外刈に引繰返る、けだし、中村の如きを稱して、来た。出た、負けた、と評すべきものならむ。

○稻垣——四宮 四宮亦長大なり、彼其の業を見せる隙だにあらせて稻垣の左跳腰に吹飛

り、息をも繼いで攻め捲くりしも龜谷危うく逃げる。

○笠原——朝川 笠原の技神に入り、練習中人をして舌を捲かしむる事あるも笠原元來好人物にして思ひ切つたる事をなますして往々好機を逸するの憾あり、此の日朝川の左腕關節の逆を立派に取りながら今一息のところで逸したるは、將に團体のために惜むところなり(蓋し朝川猛烈にして流石の笠原も疲れ甚しかりしは大に同情す)

○宮内——荒巻 荒巻立つて宜く懸て宜く容貌怪偉体軀長大ならざるも其の戦ふや阿修羅王の荒れたるが如く逆捲く怒濤の砂を巻き返し、巖に激するが如し、將にこれ五高の重鎮なり、宮内遙に望み見て莞爾と笑ひ、善き敵ござんなれと引組む、採み合ひ押し合ひ争ふ事數分宮内荒巻を押へやりと固めむとす、然れども荒巻もさるもの不思議に固き宮内の固を破つて立つ其の後兩雄睨み合ひたるまま近寄らず。

○加藤——竹村 竹村体軀小なれども五高に於ける實力の大將なり、然れどもさるより怪傑加藤の敵にあらず横揺身に倒され終んぬ。

○加藤——田中 唯段級のみを見て漠然と勝

んで首を倒に付けば忙然と自失する事半時ばかり馬鹿らしきまでに味氣無し、五高の先輩頗りに苦笑す。

○稻垣——和田 和田体軀短大、稻垣已に敵二騎を斬つていささか疲勞の態あり、然れ共敵を屠らで力を用ぬ盡さざるが如きは吾軍の絶對になすべき事にあらずれば無二無三に和田に肉迫す、和田よく機を變じて引分く。

○宮崎——本田 山口、稻垣の奮戦に由り我軍の士氣層一層とあがる、本田軀幹細長、腰を引いて逃げながら對手の足を蹴る様馬の如し、支釣込足にて破らる。

○宮崎——鳥井 鳥井中肉五高とせば相當にやる方なり、宮崎立つて攻む鳥井も亦立つて守る、引分に終る。

○井浦——本多 本多身長大臂力業に勝る、昨日對六高戦に於て六高の猛者三人迄取絞めたる豪の者、將に五高の中堅なり、井浦素より勇猛の闘士なり、一揖終るや敵の懷に飛びこんで引きたほして押へ込まんとす、廢業亦吾も望むところと本多井浦手を取り首を縮め蹴返す上になり下になり、呼吸迫りうめく聲觀客の腸を割り流るる汗穢古着をビツシヨリと濕す、今や流石の本多氣も力も抜け果

敗を論ぜむとするものは、此の勝負素より論ずるの價値無し、加藤何勿れぞ田中の敵ならむさわかさんも事實は正に反對なり、田中加藤のために巴投にて業を取られ、次で押へこまる、加藤はかくて苦も無く敵の副將大將を抜きて猶喰ひ足らざるの相あり。

戰跡を見るに五高は如何にも無慘なる敗を取りたり、然れども彼等本年の南下は來年の爲の南下なりとは前よりの風評なりき、其の率ふるところ多くは一二年なりき、彼等破れたりと雖其の堂々たる態度肥後武士に恥ぢず、負けず魂の強き事敵ながら見上げたるものあり、新居の腕を折らるるや、我校の先輩はこれを見舞ひて「痛は如何ですか」と尋ねたる時、彼は繃帯の上より傷口を靜に擦りつつ、「痛は何でも無いが、試合の経過は如何ですか」と尋ねたりと、苟も高等學校を代表して行く選手かくの如きの覺悟は素よりの事ながら、彼等五高を何時も本年の如くならむと思はば不慮の危険に遭遇せざるを保し難からむ。

○優勝戦(四高對六高)廿九日午後二時開始。吾等が常に頭をなやましたるは交戦の未知數にある對六高戦を豫想しての作戦なりき、

てて見ゆれば井浦此處ぞき衝け入りて上四方に崩し込む。

○井浦——景山 景山立つて亦近寄らず、井浦これを押へて捕んとす、今や時間も終らむとする頃井浦勝を急ぎて彼に飛び付きこれを引き倒さむと焦る間に景山の内股に引懸る、景山の勝や勿論拾ひものにして井浦の眞は眞の眞にあらざるも眞は眞なり、好漢性に自重して亦繰返す事勿れ。

○竹村——景山 竹村戰友の修羅の志執を濟すべく何を猪口才なと飛び出す、景山長大にして蠻力有り思はざる勝に氣を得て勇を鼓して竹村を迎ふ、竹村引き込まむとすれば彼竹村を指し上げては付き落さむとす何れを失敬なとばかり竹村惡龍の如く捲付きくこれを倒して押へむとせし事數次未だ一本をさらざる中に定刻は過ぎぬ。

○中川——龜谷 到底勝難きを晩時ながらも覺れる五高の先輩は其の選手をして身を捨てて攻撃をなさむと、こゝに於てか戦は益々猛烈となり目覺なんぞ言ふもおろかなり、さる程に表はれ出でたる五高の龜谷体軀長大にして色飽迄黒し、中川慄悍にして立業を尤も得意とす時々大物を喰ふ我軍中の潛航艇の名有

昨夜十時兩軍メムバーを交換す、廿九日午後二時より機員七段審判の下に第五回柔道大會優勝戦は始まる。

○紅(四高) 白(六高)

大將 二段阪田 大將 二段濱田

副將後藤 副將 二段秋山

三將加藤 初段受川

二段中内 初段木原

二段田原 彦坂

二段大後 井上

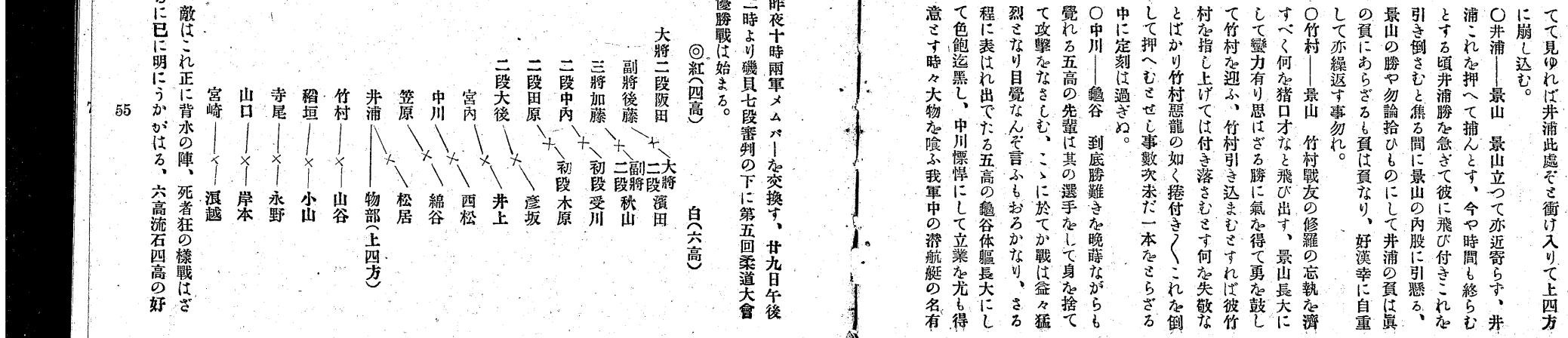
宮内 西松

中川 綿谷

笠原 松居

井浦 物部(上四方)

竹村 山谷



敵手立つて宜く逆も好く寢業は其の最も得意とするところ、唯四高はあらゆる点に於てこれに優る。

○宮崎——濱越 兩軍の先鋒多くは技大差無く、八分と云ふ單時間に於ては吾彼を取統むるに到らで遂に引分けに次ぐに引分を以てす、先づ宮崎濱越と引き分ければ續く山口敵手岸本を攻め捲くりしが亦引き分く、寺尾病氣のため本日迄出陣せざりしが、神の力にや今や全快して花らしく初陣す、敵手永野大ならざれども善く守りて引分け、代る稻垣、竹村亦引分に終る。

○井浦——物部 物部体中、剛氣寢業を得意とす、先に立たず、井浦の好敵手たるを失なはず、井浦しばしば押へ込まむとすれば彼彼逆を以て劫かす、井浦亦逆を以て攻むれば彼懼れて避けむとする其の時、井浦隙を突込みて上四方に押ふれば物部亦立ち能はず六高敢て頭を擧げて見る者無し。

○井浦——松居 松居必死の勇を振ひて攻む顔色蒼白なり、井浦時に逆襲して返討をせむの氣勢を示す、吾は已に一人の勝越あり、唯今後負けざれば可なるを以て志氣軒昂落付きあり敵は焦りに焦る。

○笠原——綿谷 綿谷立業を得意とするも亦寢て可なり、笠原立て攻め終に引分け續く中川、宮内は西松、井上と引分く、西松依驅小にして襟を持って直に寢、井上は絶對に立たず、大後彦坂に對す、大後得意の續を以てぢり〜と肉迫す彦坂驚いて逃げ出すも彼大後の立業をや知りけむ直ちに亦寢る。木原堂々たる体格なり、彼田原の襟を取るや寢て立たず、田原得意の攻勢防禦に依りて樂々と引分く。

○中内——受川 受川亦怪物なり、一昨日對五高戦に於て副將大將を押へ込むで大いに得意なり、吾こそ我六高の危機を救はめこそ一生懸命なり、これに對する中内、四高の驍將北陸の重鎮、何ぞ彼が如きを恐れむやと腕を撫して向ふ、受川例の如く足を取りに来る、中内腰をつけば彼生意氣にも押へに来る、然も未だ全く押込に入らざるに如何したりけむ審判官は押込三十秒と宣す、吾等の耳には百雷の面前に落ちたるが如く響く、此の時中内猛然敵を蹴つて直つくと立ち、得意の跳腰を以て攻むれば受川亦立たずしそ一意寢て取らむとして終に引分く。

○加藤——秋山 未だ嘗て四高に勝つ自信あり

呑んで寂として聲無く唯阿吽の聲天地を震撼する様無人の野に怪獸の相搏つに似たり、後藤敵のズボン破る事三度、濱田踏み込み踏み込み息を繼いで攻む事二十分然もいささか疲勞の色無し、後藤意氣益々盛んにして敵に肉迫して已ます、何時勝敗の果つべしとも思はれざりしが早くも廿五分は経過して引分に終る。

かくて我軍は大將阪田不戦にて第五回優勝をなす。荒木會長より優勝旗を授與せられて凱歌を奏して宿に引き擧げたり。

六高連年四高のために敗ると雖もこれ彼の弱きにあらずして吾のより強きがためなり、彼は技のみならず其の精神に於て亦我四高に近きものあり天晴なる好敵手幸に自重せよ。

今や斯くの如くして本年度南下は神人共同の力に依りて兎に角先輩の業かれたる歴史を汚す事無く其の華の高塔に一段の高きを加ふる事を得たり、思ふに取らむとするは易くして手に入れたるものを取られざらむとするは難事なり、京大に於て全國各高等學校専門學校柔道大會開始以來五回連年集まるもの幾校なるを知らざれども常に我四高は最優勝者の位置に立ちて他校をして其の光榮の徵象たる

優勝旗に一指の觸るるをたに許さず、見よ北辰燦として年と共に益々其光輝を増すを、然れども思へ、ローマのなれる其の由來亦遠し、我四高柔道部の連年勝を得る素より神や先輩や校友の御援助に由る事ながら一面我四高柔道部に流るる我四高柔道部の精髄たる流れスピリットと言ふものが固く〜部員の心に浸潤して一度我柔道部に入りたるもの、一度我柔道部員となれるものはこの流れスピリットなるものの靈感を受けて、何者をも貫かすんば已ます、我等柔道部の主義のために區區たる個人の利害を論ずる事無く部の目的に合致せむと言ふ尊き犠牲的精神を養はるるに由るものである我等は此の犠牲的精神を益々涵養し、部外に及ぼし〜に四高の流れスピリット、四高魂と言ふものを養つて我四高を益々發揚せむとするものである。

十二月三十日夜八時萬歳聲裡に京都驛を發す、三十一日金澤の天地に五度其の凱歌を奏し得たるを校友諸兄に此處に更めて感謝し得るを光榮と思ふものである。

○寒稽古 一月十三日より向ふ四週間猛烈なる寒稽古を始め、土曜の午後一時より三時迄を除く他

りさ洩したる事無き六高が、本年こそは如何にかして負けざるの期待有りとは謙遜なる六高の先輩の言なりきとか、されば秋山、今我勝たずんば亦何れの時を期してか積年の怨を曇らさむや悲壯の覺悟物凄く秘術を盡して懸れども互に自重だにしてあらば唯實力の争にして偶然なる饒倅なぞは絶對に許さるべくもあらざるこの柔道の試合に於て氣の毒ながら秋山に加藤を倒すだけの力無く却つて加藤のために脅かざる、肉彈相摩する事廿分終に引分に終る。

○後藤——濱田 頼にしたる受川、秋山手を空しくして歸るを見やり、將軍濱田、我軍を救ふは吾の他にあらざるなり、然らば吾亦一人行かむと悠然と出づるを見れば長大なる体軀堂々たる風貌正に三軍の將帥天下の強敵六高軍の御大たるに恥ぢず、而も濱田當年元氣衝天の評あり、これに對する我軍の後藤筋骨逞しく肩幅最も廣し、眼光炯々として人を威壓し力亦其の風貌を恥しめず、濱田立つて最も善く後藤寢て最も可なり、兩雄の互に戦ふや武徳殿上千疊敷の臺を蹴上げ跳返し組んづはぐれつ上になり下になり寄つては離れ離れして亦寄る様龍虎の相争ふが如く四邊片唾を

は毎日午後六時より八時迄、校長閣下や江川師範の御熱心なる御指導今更ながら感謝に堪えず、皆出席正に五十名。

○柔道大會

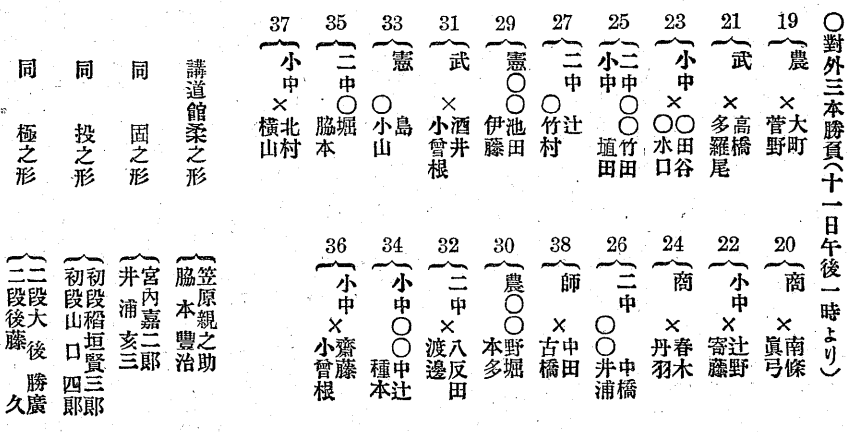
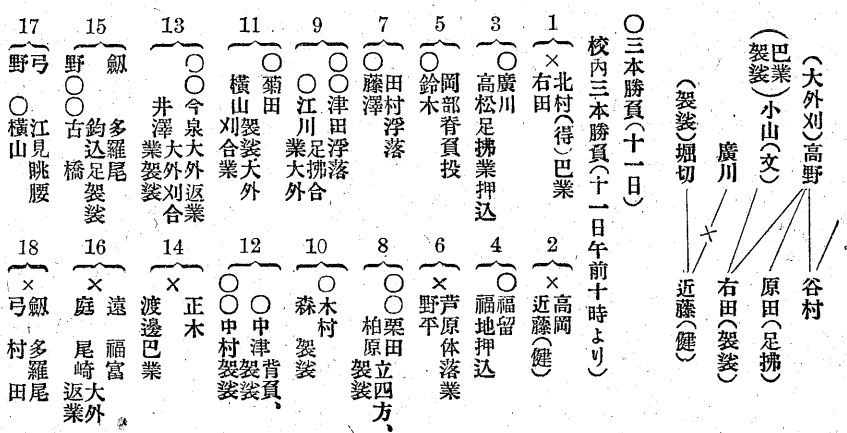
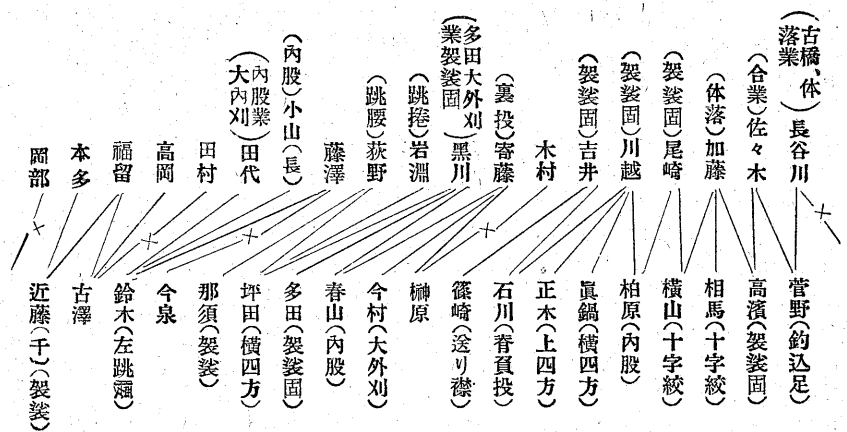
第二十五回柔道大會は二月十日、十一日の兩日に亘りて盛大に舉行せられたり、十日午後三時會長の開會の辭終りて直ちに紅白勝負に移る。

紅

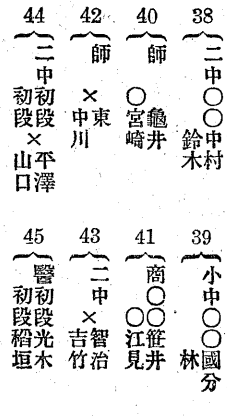
- 大將 二段 後藤
- 副將 初段 山口
- 初段 山田
- 宮内
- 中川
- 竹村
- 井浦
- 宮崎
- 渡邊
- 櫻井(袈裟固)
- 小曾根(拂腰)
- 今田
- 古橋(小内刈業)

白

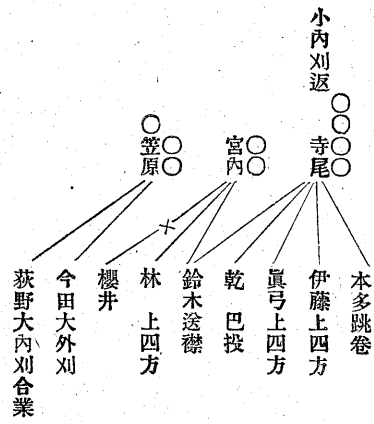
- 大將 二段 加藤
- 副將 初段 稻垣(左跳腰)
- 初段 笠原
- 寺尾
- 吉竹
- 井浦
- 宮崎
- 渡邊
- 櫻井(袈裟固)
- 小曾根(拂腰)
- 今田
- 古橋(小内刈業)



後之先
講道館五之形
二段阪田靖人
二段加藤敬道
二段中内榮基
二段田原剛



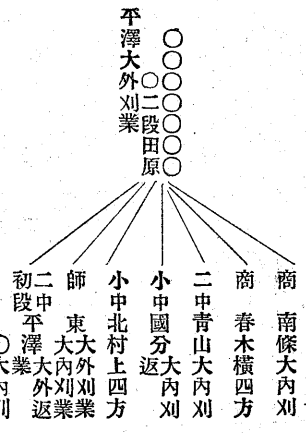
○番外紅白試合
(紅)
(白)



○七人掛

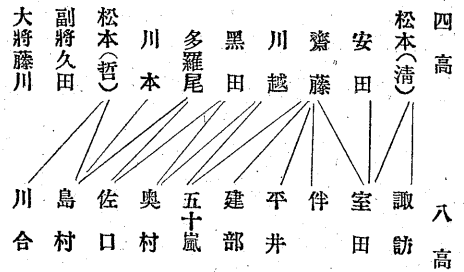
剣道部

▼十二月廿四日夜多數の會員諸君に送られて



午後六時半會長の閉會の辭有り、外來選手に粗菓を呈す、終に當り本日の外來選手諸君及特に、審判の勞を取られたる、高島、松田、八田、柿崎の諸先生に深く謝す。
かくて、南下終り寒稽古終れるも吾等は亦本年十二月に於ける南下に備ふべく選手一同は少なぐとも柔道の副科の時間に當る火、水金の第六限には道場に於て練習すべければ校友諸兄の御援助あらむ事を請ひて擲筆するものなり。(大正八、三、十八、水口)

金澤を出發した。何たる尊嚴な光景だらう。翌廿五日午前九時入京。午後大學の道場で稽古。
廿六日は武專の道場を借りて猛烈に稽古した。明ければ廿七日、戦闘は開始せられた。第四回は四高對八高の試合。その番組は次の如くである。

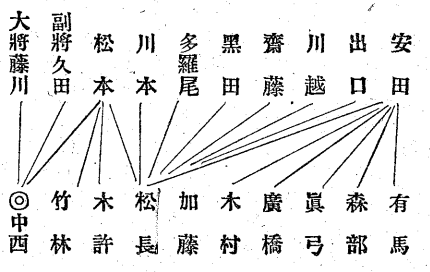


廿八日第三回到四高對大阪醫大豫科の試合死物狂の敵の奮闘に武運拙なく敗をとる。

四高 大阪醫大

とす。皆勤者六十人。

▼剣道大會を二月十六日午前八時より開催す
番組は次の如くである。
午前之部校内三本勝負



敗亡については何も言ひたくない。唯、熱烈なる應援をして下さつた我が校友諸君並びに先輩諸氏に對し慚愧の情に堪へぬ。
参考までに本年度の各校の勝負を記しておく。

廿七日

- 七 高 — 三 高
- 山口高商 — 六 高
- 長崎高商 — 〇五 高
- 八 高 — 〇四 高
- 神戸高商 — 大阪醫豫

金澤第一中學校 二月一日
 齋藤 松本 多羅尾 黒田 川越
 商業學校 二月五日
 山本 小倉
 工業學校 二月十五日
 江川 尖倉

- 〇〇 瀧川 一忠
- 〇〇 本間 佐吉
- 〇〇 折田 曹長
- 〇〇 齋藤 幸次
- 〇〇 江口 吉康
- 〇〇 多羅尾 光道
- 〇〇 武原 得順
- 〇〇 黒田 吉夫
- 〇〇 稲垣 少尉
- 〇〇 久田 二郎
- 〇〇 平田 中尉
- 〇〇 川本 弘夫
- 〇〇 松本 哲隆

廿八日

▼本年度の寒稽古は一月十三日より二月九日までとす。二月十二日、十三日を餘寒稽古

番外北辰會各部試合

- 〇〇 乾島
- 〇〇 遊富田
- 〇〇 庄司
- 〇〇 山口(利)
- 〇〇 庭上田
- 〇〇 講中島
- 〇〇 弓江見
- 〇〇 沼高濱
- 〇〇 野上山
- 〇〇 講上田
- 〇〇 草刈谷
- 〇〇 増土田

午後之部

- 大日本帝國劍道之形
- 太 刀
- 小 太 刀
- 大森流居合
- 長谷川流居合
- 番外武徳會少年組
- 〇〇 上山 理吉
- 〇〇 小中 義代
- 〇〇 林 保
- 〇〇 吉岡 重勝
- 〇〇 武 深町 武夫
- 〇〇 小倉 一 郎
- 〇〇 工 成田 節雄
- 〇〇 石黒 諒二
- 〇〇 工 松原 秀雄
- 〇〇 林 正 章

對外三本勝負

- 〇〇 商 堀内 仙勝
- 〇〇 吉井 甫
- 〇〇 武 深町 武夫
- 〇〇 小倉 一 郎
- 〇〇 工 成田 節雄
- 〇〇 石黒 諒二
- 〇〇 工 松原 秀雄
- 〇〇 林 正 章

廿九日優勝戦

▼本年度縣下各學校劍道大會に派遣した選手は左の如くである

金澤第二中學校 一月二十五日
 川越 安田 田中

石川縣師範學校 一月廿六日
 松本清 安田 田中 江川

金澤醫學專門學校 一月廿六日
 齋藤 松本 多羅尾 黒田 川越

金澤第一中學校 二月一日
 松本 黒田 松本清 北村

商業學校 二月五日
 山本 小倉

工業學校 二月十五日
 江川 尖倉

山本 小倉

工業學校 二月十五日

商業學校 二月五日

山本 小倉

工業學校 二月十五日

商業學校 二月五日

山本 小倉

工業學校 二月十五日

▼本年度の寒稽古は一月十三日より二月九日までとす。二月十二日、十三日を餘寒稽古

かゝて五時半閉會。

▼選手の稽古日は火金土である有志の諸君は振つて出らしたい。昨年八月の大會記事は次號にまはす。(土手守吉記)

野 球 部

南下軍記事

白山、立山の頂上から、段々と白く下へ下へ、終には醫王山の中腹まで、次第に雪の幕が降りて来た。仙石ヶ原の原頭に吾選手はユニホームの土で眞黒になつたのを着て、手は冷えて堅く、日は暮れて暗くなつても、必

死の元氣で、一心不乱に練習に没頭して、日に焼けた必勝つこ云ふ意氣の良い顔をして、来るべき晴れの南下の日を待た。

雪の暮は次第々々に下りて最早やグラウンドは全く雪で蔽はれて、練習は出来なくなつて、静勝館の中へ逃込んだ。

天候は益々吾等を悪んだのか、静勝館内の練習も、ボールを見えなくして、不可能ならしめ様とした。選手は笑つた。そして前より一層大きい眼をむいて、それでも出来なきや心眼で見てやれと云ふ決心で、練習を續けた。

試験が済だ十二月廿四日、吾選手は、勇士が大合戦を待つ様な態度で、石浦神社の社殿で、武運を祈り、勇壯な南下軍の歌に送られ金澤を後に京都へ出發した。

夜晩く迄、明日の計畫を指揮してくれた先輩を送り出して床に就くまもなく、東山の山の端に夜の暮は破られて、待ちに待た廿六日の朝が来た。二高との決戦の日がきた。曇た日で寒さ烈しく、自分が起きた四時頃は、雨さへあつた。何れが勝か、凡て疑問、豫想がつかかなかつた。

兩軍無爲。

第四回。羽田Bに打ちしも殺さる。片桐S.Sに殺さる。齋藤大飛球をC.Fに上げて終る。四高交る。山本四球に一壘を得。古橋安打して山本三壘に入り機を窮ふ。四高軍意氣昇り應援熱狂す。瀧澤三振。古橋機を利して二壘を得んとす。時に塚田Sに卮球を打つ。あわや、安打と思いが、とりて二壘に投じダブルプレーとなる。山本空しく本壘に入る。兩軍無爲。

第五回。手島C.Fに飛球をなして死す。深澤のPゴロをC取りて一壘に投ぜしが間に合はず。P川俣のゴロを取りIBに投じ深澤死す。原田C.Fに凡打して終る。四高、村山IBに打ちて死し。横地三振、P榊井の打ちし球を一壘に投じて終る。兩軍無爲。

第六回。新谷安打。萱場IBに打つ新谷二壘に殺さる。羽田死球に會い。片桐一壘の飛球に死す。萱場三壘を占む。齋藤の安打に萱場羽田。生還。手島C.Fに飛球を打ちて終る。四高、横山四球。磯谷飛球に死す。山本三振。古橋Pゴロにて終る。二高。二点。四高無爲。

第七回。深澤IBに打ちて死す。川俣飛球に倒れ。原田安打し新谷安打して原田生還。萱

「今日の勝負は何如だらう。」と考へてるとき、大學の大會の委員から「小雨でもやる」と云ふ電話がきた。日本海々戦で「敵艦は東水道を通るもの、如し」と云ふたあの哨艦の無線電信の様に自分には響いて、喜んで選手を起し廻つた。皆元氣の良い顔で飛び起きた。

中松氏の球審、坪井氏の壘審で、九時三十分の振鈴が三高運動場内に響き渡る。二高軍先攻で決戦の火蓋は切り放たれた。此日のバツタオナーダーは次の如くである。

四高軍
S.S III P.C C.F II R.F. L.F
山古瀧塚村横榊横磯
本橋澤田山地井山谷

二高軍
S.S II C.F P. R.C. III I
手深川原新萱羽片齋
島澤俣田谷場田桐藤

戦況
第一回。審判の開始の號令と共にまづ二高軍、手島ゴックスに立つ。萬場聲無し。手島第一ボールを左翼に快打し一擧にして三壘に到る。二高應援狂喜す。深澤C.Fに大飛球を飛

場の内野飛球に終る。四高、瀧澤一壘に飛球して死。塚田Sに飛球して死。村山三振。枕を並べて倒る。二高一点。四高得ず。

第八回。羽田L.Fに飛球に死。片桐三振。齋藤S.Sの失に生き一壘を占め。手島の内野安打に齋藤生還。深澤IBに卮球を打ちて死。四高交る。横地Pゴロに死。榊井Sに死。横山R.Fの凡打に終る。二高一点四高無し。

第九回。川俣一壘に凡打。原田Pゴロ。新谷の内野飛球。枕を並べて倒る。四軍交る。磯谷C.Fに飛球せしが巧みに捕られ死。山本死球に生き古橋C.Fに快打せしが之又C.Fの取る處となる。瀧澤Pゴロを打ちて萬事終る。兩軍無爲。二高軍八点。四高軍零点。にて四高軍天運至らず終に破らる。

二十八日晴天であつた。山口高商に破られた八高と府立一中のグラウンドで戦つた。此日のメンバーは次の如くである。

四高軍
S.S I L.C III C.F II R.F P
山横磯塚古村横榊瀧
本山谷田橋山地井澤

して死す。川俣四球に二壘を原田の四球にて得満壘となる。新谷又四球に送られて満壘となり手島本壘に入る。萱場SとIBの間に安打して川俣、原田、生還。萱場二壘に刺され新谷三壘を得しも羽田の三振にて止む。二高軍意氣大いに擧る。四高軍交りて攻む。山本立つ。拍手起る。野次盛なり。山本投手の球を選択せんとし三振す。次に古橋S.Sに飛球を上げ死し瀧澤の三振に終る。二高軍三點四高軍得る處なし。

第二回。二軍片桐、IBの失に一壘を得。齋藤投手の失に一壘を得しも投手に牽制されて死す。手島三振。深澤の安打に片桐生還。川俣IBに飛球を上げて終る。四高交る。塚田三振。村山投手に卮球を送りて一壘に死す。横地三振。枕を並べて倒る。二高軍一点四高無し。

第三回。原田S.Sに卮球を打ちしも一壘に刺さる。新谷、内野、安打せしも一壘を踏まずして殺され萱場三振に終る。四高交る。榊井Pゴロに倒る。横山四球を利して一壘を占め二壘を窮めて殺さる。磯谷IBに卮球を打つ二壘失して磯谷二壘に闖入せんとせしがC.FIBの失せる球を二壘に投じS.Sの刺殺する處となる。

午後一時半に西村氏の球審。吉井氏の壘審にて四高軍先攻にて開始。

此の日の成績次の如し。 四高軍。

八高軍
得点。安打。三振。盜壘。四球。死球。打數
C. IB. HB L.F P S.S. R.C.F. IIB.
辻山大堤伊柴西伊稻
田多 藤田川東葉
P. IB.

山本。 0 0 1 1 2 0 0 3
横山。 0 0 1 1 1 0 0 3
磯谷。 0 0 0 0 1 1 0 3
塚田。 0 0 0 1 2 0 0 4
古橋。 1 0 0 1 0 0 0 4
村山。 0 0 0 1 0 0 0 3
横地。 0 0 1 0 1 0 0 4
榊井。 2 0 1 0 2 0 0 4
瀧澤。 0 1 0 2 0 0 0 4

八高軍
得点。安打。三振。盜壘。四球。死球。打數
辻。 0 0 0 0 0 0 0 5
山田。 1 1 0 0 0 0 0 4
大喜多。 1 1 0 0 1 0 0 3

遠足部

堤。	1	1	0	0	0	0	4
伊藤。	0	0	0	1	0	0	4
柴田。	1	1	0	0	0	0	4
西川。	0	0	2	0	0	0	4
伊東。	1	0	0	0	1	0	3
稻葉。	1	2	0	0	2	1	3
1	2	0	0	2	1	0	3
2	0	0	0	0	0	0	3
3	0	0	0	0	0	0	3
4	0	0	0	0	0	0	3
5	0	0	0	0	0	0	3

得点合計。四高三点。八高六点。

四高軍残念にも又敗北す。

待ちに待た南下も二戦二敗で、もろくも破れてしまった。選手は勿論應援してくれた人も、凡て落膽せざるを得なかつた。その日は涙に暮れて、明けた廿九日の夜、開散して選手に自由行動を許した。

自然の恩恵に浴しないでも、男の意氣と決心で不幸な運命を、何處までも開拓して、幸福な日を作り出そうと努力した選手の元氣は、必ず何日か陽春に會うて、榮えある、若若しい、翠緑の滴る様な芽を出すであらう。嗚呼。その日が見たい。その報知が早く聞きたい。

其日を期待して、欄筆す。

(一九一九三、一〇、中村憲治)

土曜會

文明は自然を征服する過程である、といふ命題は誤謬である。人が自由、幸福を最高の憧憬としてゐる以上、人と自然と引き離した處に何處に文明があるか、何處に文化があるか。自然を否定した生活は、人を破綻に導き悲惨な結果とするに過ぎない。

眞の文明は自然と調和する道程にある。人生は哲學ではない、詩である、藝術である。禽獸草木を抱容する自然と人との相互的透徹によつて贏ち得られた調和的統一に眞の自由があり、幸福がある。省察的、談理的なるよりは直覺的、詩的なる所に眞の満足が涌く。同情の精神と平和悦樂の情趣を持つて自然の内的生命に透徹しなければならぬ。斯くの如きは、人の心の奥に横はる本質的、必然的要求である。現代の趣味は原始に向つて走つてゐる。

「湧き出づる水は單に我が手足を洗ふと思ふ勿れ、我が靈に觸れて心情を清む。大地は單に我が體を支ふと思ふ勿れ、

我が心に觸れて平和の悦びを與ふ。」

と波羅門の詩人は力強く歌ふ。自然の萬物は裸體のまま、燦爛としてあらはれ、壯嚴雄麗の極みである、萬物は皆新しい、といふカール、大自然を痛感した獨歩、これらの人の言は人間性本然の叫びである。多くの形式主義者と因襲主義者との間に生活を強ひられる吾々は時に自由の天空の下に翼を擴げなければならぬ。ヒクヒク動く生きた魂の憧憬と要求とを充さなければならぬ。大正二年に土曜會が生れたのはかう云ふ慾求からであつた。然し土曜會は遠足部の副事業である。遠足部の事業は多方面である。曰く、遠足、旅行、登山、ランニング、スキー。各々獨立して充分發展すべき領域を持つ。近き將來に於て登山を専門とする山岳部が創設せらるべきである、日本アルプスは年々片端から踏破して行く。過去には奈良ヶ嶽に二人の尊い犠牲者を出してゐる。

遠足部の特色は強行軍で山河を跋渉して、なほ其處に自然を樂む餘裕を見出す事の出来る程健脚の所にある。然し土曜會の方は土曜の半日又は日曜、祭日の一日で近郊を逍遙するといふ至つてのんびりした所に特徴がある。

自分達は土曜會がズンズンと成長して周圍を照らす程に早く光つて呉れ、ばい、と思つてゐる。而して出席者が多數であつて欲しい。

學年の終りには出席数の多い人に粗賞を贈る事になつてゐる。敬虔な自然の熱愛者を飾るには餘りに物足りないが、外に勝れた方法も見つからないから仕方がない。

土曜會の略則は次の如くである。

- 一、本會は土曜又は日曜等に於て簡單に有効なる遠足をなすを目的とす。
- 一、本會は北辰會々員を以て組織し、遠足部に附屬す。
- 一、學年末に於て参加回数多き者には特に賞を贈る。

各部は北辰會の各部である。選手だけとか役員だけとか或る特殊階級の各部ではない。故に各部とも公開でなければならぬ。妖雲に包まれた秘密は、城廓を設けた獨占は、絶對に排せられなければならぬ。吾々は部の事業を會員諸君に報告する義務がある。

(ひろせ、としを)

第一回。野田を経て黒壁に。

九月十四日(土曜日)、曇後小雨 一行六拾

八名。

維新の刺客島田一良の墓から直ぐ閑寂な野田山には入つた。大藩の墓地だけに儒者、劍師の墓石が老杉鬱々たる所にあつた。柵をくぐつて前田家の墓地を通り、裏につき抜ける萩、女郎花、桔梗、菊など今を盛りと満山の秋を潤色してゐた。別所には相變らず鬱蒼たる竹林があつた。筒飯のことを思ひだしながら、黒壁に行つた。天狗が住むとまで昔云はれた黒壁は、昨年の大雪の時なだれがあつて、木が皆谷間に根ごと落ちて了つたので明かるく殺風景であつた。が水だけは以前のまま、綺麗であつた。

校長、高島部長、高木先生、西先生が参加された。

第二回。倉ヶ嶽登山。

九月廿二日(日曜日)、晴。一行八拾參名。

頂上にはもう二三十人が休んでゐた。藪を抜け出て後から後からと來た。汗をふきながら眺めた。加賀の平原が割然として展開してゐた。平和な豊潤な色彩であつた。廣く展望される、黄色い稲田には碁盤に黒石を落したやうに村落が置かれてゐた。後には無數の峯

峯が蜿々を續いてゐた。十年前内の學校で二人の死者を出した奈良ヶ嶽も見えた。あの凄慘たる暗雲の去來、灰色に暮れ逝く蕭條たる晩秋の風物などは、どうしても思ひ出せない程、平和な日であつた。高島先生は、この山が富樫氏の城跡である事から、いろいろ山の史實を物語られた。

九月廿九日(日曜日)。大雨。

醫王山登山の豫定であつたが大雨で中止。

第三回。競走路實地踏査。

十月五日(土曜日) 雨。一行四名。

十月六日(日曜日)。大雨。

俱利伽羅行の豫定を延期して、北陸毎日新聞社主催の十三哩マラソン競走に選手三名派遣。

練習不足の爲め、選手三名とも頗る疲勞し、しかも成績不良だつたのは、残念であつた。そして選手諸君には氣の毒であつた。

着順 時 間

一二 一時三十八分四〇秒

佐治 幸徳君(一部)

一六 一時四一分二〇秒

布施 四郎君(三部)

二一 一時四三分四二秒

荻野市太郎君(二部)

参考

一着 一時三〇分一〇秒

田中(二中)

二着 一 三三 三〇

北田(師範)

三着 一 三四 〇七

細田(二中)

第四回。醫王山登山。

十月十三日(日曜日) 雨後曇。一行參拾參名。

朝雨が降つてゐたので、道が非常にすべつた。あけびが澤山あつた。(醫王山の記事は來學期に廻す)。

十月卅一日。マラソン競走の打合の爲め、部長、委員全部教官食堂に集合。

第五回。觀月會。

十月十九日(土曜日)、快晴。一行參拾貳名。中秋の名月を金石方面から見ると。午後三時半校門集合、携帶の晩食を金石の海濱で。

第六回。マラソン競走。(第八回長距離競走)。

十一月三日(日曜日)。

ランニングが一技術として専門的に研究せられる今日に至つては、我が四高にもランニング部として一個の獨立した部が北辰會に創設されなければならぬ。長距離、中距離、短距離選手も分業的に研鑽して行く現今に於て何故四高のみ獨立したランニング部といふものがないのであらう? 殊に今年度の如きは、長距離、中距離の競走に於て中等學校にさへ壓倒されてゐるやうな、みじめな有様なのに拘らず、何故四高のランニングを代表する選手を訓練する機關が起らないのであらう? 運動界の霸王、四高を組織する部員の内に何故ランニングの勇將を出さぬのであらう?

是には二つの主なる理由がある。第一は校内に於て一部、二部、三部と小さく分離して對部レースの爲にそれぞれ違つた方針で練習してゐて、そこに何等の統一がなく、従つて大なる効果を現はさぬこと。第二は北辰會の部として獨立したランニング部がない結果中央的に發展する方法と機會のないこと。この二つは最も重大な原因であるが、其他教官の

中にランニングに對する理解の鮮いこまや、

餘りに華々しい南下軍の活動の爲に、其の他の運動例へばランニング、スキー、乗馬、登山などが比較的貧弱に一般に認められることなども副因又は論理的條件となつて、それらが複雑に入り混じつて今のやうな、状態になつたのである。

遠足部が四高ランニングの事務を執るのは副業的である。従つて到底完全を期する事は出来ぬ。が出来ただけのこととはやつてゐる。

從來の遠足部の長距離競走は凡そ十哩のクロスカントリー、レースであつた。五人の團體が五分毎に出て、最後の者が決勝線には入つた時を以て、其の團體のレコードとするのであつたが、其の目的として剛健の氣象を協同の美風の養成といふやうなことが標語になつてゐた。然し今は時代の趨勢が變つてゐる。ランニングその物の進歩を計る爲、即ちレコードを上げる爲に競走が行はなければならぬ。單なる駆つこの競走といふやうな興味本位であつてはならぬ。國際オリンピックゲームの豫備といふやうな、眞面目な研究的態度で、競走は行はなければならぬ。今年度の競走の要項は次のやうであつた。

- 出發線 靜勝館前
- 第一關門 金石本町より冬瓜に至る角
- 第二關門 下福増企業銀行前
- 決勝線 靜勝館前
- 距離 十三哩。

全部個人の競走として、晴雨に係らず舉行。

結果

- 第一着(賞) 荻野市太郎君 一時三三分五四秒
 - 第二着(賞) 佐治 幸徳君 一、三六、一一
 - 第三着(賞) 佐々波誠次君 一、三七、四
 - 第四着 小竹 道雄君 一、四〇、二四
 - 第五着 小曾根貞三君 一、四六、三六
- (以上校内)
- 第一着(賞) 田中君(二中) 一、二八、四
 - 第二着(賞) 大島君(師範) 一、二九、二八
 - 第三着 細田君(二中) 一、三二、二五
- (以上公立)

校内の選手は長田町の鐵道踏切で通行中の汽車に妨げられた。

當日の出場人員二十四名に過ぎないほど貧弱であつた。當時折あしくスパニッシュ、インフルエンザが猖獗を極めてゐる中で、一中、商業などは爲に休校中であり、又申込みたる北辰會々員諸君の内にも之に犯された諸君が

あり、加ふるに當日は夜來の冷や／＼した雨で、地面がぬれてゐた。それで折角緊張して準備したマラソン競走も充分の成績を納める事が出来なかつたのは呉々も残念であつた。

十一月九日、十日

尾小屋銅山視察、那谷紅葉狩を計畫し、同志を既に募集したが、スパニッシュ、インフルエンザ流行の爲め中止。

二月廿三日(日曜日)

俱利伽羅行は降雨の爲め中止。

第七回。俱利伽羅

三月二日(日曜日) 快晴 一行四十名

「可なり苦しいね」

「うんさうだ」

「何しろ八百尺あまりを一息で行かうてんだからな」

「うん」

津幡で下車した一行は舊道をどんどん登つて行つた、もう世界は春になつてゐる。露の丸い玉もふくれてゐた。褐紫色の杉、狐色の山、それが紺青の空をバックにして、日が

ホカホカと暖かい。柴山には下生えを刈る人がゐた。道の芝草も枯れたまゝではあるが、地面には新しく生きんとする力が充ちてゐた。氣の早い蛇はもう穴から出てゐた。

「いゝなあ、茲で飯にしようか」

「少し早いやうだけれどね」

手向神社の境内で能登、加賀を展望の裡に入れて、うす寒い風に吹かれながら握飯を食つた。

すぐ隣の長樂寺の跡には石の祠が三つあつて、宮様の御立ち遊ばした記念碑も立つてゐた。そこは峠の内が一番高い所で、越中、能登、加賀を一眸に集める事が出来た。河北湯が碧く眼下にあつて、日本海は限りもなく廣漠とひろがつて、天と一線を劃してゐた。寶達山は近くゆきんで、肩に逼る。越中の平原は村落が緋のやうに散らばつて、日本アルプスの續きは眞白に見える「素的だ、素的だ」と感嘆して眺めてゐた。

七百三十七年前壽永二年の戰の跡には芭蕉の「義仲の寢覺の山が月かなし」といふ句が石にはりつけてあつた。所々に古跡の説明があつた。平家物語と源平盛衰記にある俱利伽羅落しの條がまご／＼と胸裡にふが／＼した。

御野立所の跡には、東屋が残つてゐた。福光は、城端は、高岡はと一々指さし得られた。春は平穩である。枯草の上になれこるんで日向ぼつこをしてゐると、何もかも忘れてゐられる。

石動驛の前の茶屋でコンパをやつた。菓子をお茶をバクツてはお茶をがつかつた。時間があるので新道を俱利伽羅驛まで行つた。新道の絶頂まではフルスピードで登つたが、相談するともしに降りば駈け出した。活動寫眞のやうに駈け出した一行は、驛まで可成りの道をマラソン競走のやうに走つてしまつた。小さい驛に一ぱいにふさがつて、そしてあははは笑つてゐた。

夕方充ち足りた心を抱いて、いそ／＼と金澤驛を出た。

第八回。傳燈寺穴居時代の遺跡

三月八日(土曜日) 少雨 一行拾名
少し雨が降つて来たが十人して出かけた。土曜會でこんなに少數の事は珍らしい。雨さ試験で變節したんだらう。向山を越えて傳燈寺に着いたのは二時半。

去年の暮に「今度來マツシャル時に、葉書

もは入る事は出来ぬ。鉄の人から土を側へつけてもらつてやつと犬のくぐるやうな穴にしてもらつた。洋服の上衣もズボンも皆ぬいで、シャツとサルマタだけになつて兩足から先に突つ込んだ。立穴の底へ手をついて、しまひには肘をついては入るゝ腰がつかへた。土にゴリゴリ肩をすり付けてやつと中へ這入ると中は眞暗だ。入口においた蠟燭を、四ノ這になつて手を延して取つた。

中は横穴と同じ形式である。初めは誰も這入つて來なかつた。「おーい、どうだい？」と立穴に飛び込んだものがいふ「素的だぞ」といふさ足から這入つて來た。腰までは中へは入つてゐても、胸はまだ途中にひつかつてゐる。靴がバタバタ動いてやつと全身が穴の中にある事が出来るのだ。素足も出た。足駄も出た。下駄も出た。とにかく足からさきに現はれて腰、胸、肩、頭、兩手さいふ順序で中へは入つて來る。十人とも皆中へは入つた。蠟燭で四方を照して見る。暗黒の洞穴の中で、數千年前のコロボツクル時代の、人類の生活状態を遠く思ふ。十人の眼は好奇の輝きで燃えてゐる。

一番先に這入つた自分は又一番先に出た。

を出マツツ。横穴も立穴も皆案内して進マツチャ」と好意を提供してくれたこの村の西川といふ人の所へ行つた。お茶を出してくれたりなごしてから、鉄をかついて、はだしになつて先になつて出かけた。先づいつも見ろお寺の裏の横穴へ蠟燭をつけては入つた。やつぱり此の前の通り入口は小さく、蹲踞んでやつさは入る事が出来た。蠟燭でぐるりと見廻すと貝殻の跡がハツキリと見える。化石をはがして誰かが採つた跡なんだ。高さは六七尺、周囲は丸くなつてゐた。「此の中にもう一つありミスツ」と云つて自分がかつて這入つた事のある所を指差した。十人ともみな一人づつ、腹ヲ這になつては入る。やはり同じやうに圓い。中はホツカリと暖かい。この第二の穴から出る時は足から先にしなければならぬ。テナデに蠟燭を持つて小さい口から出て來る。「ツゴマの覽窟のやうだね。活動に撮るにはいゝ所だ」などと云つては足から一人づつ出て來る。第一の穴にはもう一つ横にある。蹲踞んで蠟燭をつき出して見るとやつぱり水がたまつてゐた。薄氣味悪いから中へはは入らずに外へ出た。明るい所へ出るさ、どいつもこいつも肩から砂だらけだ。

先づ手で歩いて肩を運ぶ。膝で歩いて腰を押す。次には肘と頭で胸をひつぱり出す。やつとの事で立穴の底に立つた。それから立穴を木の枝につかまつて這ひづり上り鉄の人に手を引いて貰つて上へ出た。上といふのは普通の地上なんだ。

第二の人が穴から頭を出した。蚕の蛹が繭を喰ひ破つて出る時のやうに、シツクラ、モシツクラと体を左右に動して出てくる。三人目、四人目……と同様にして十人とも上つた。見ると何れも全身砂だらけだつた。コロボツクル研究する學者はコロボツクルのやうな眞似をしなければならぬ。學者も随分苦しむんだらう」と妙な所で、學者の觀察や實驗に伴ふ困難に同情するものもゐた。

「この立穴は、實は十年以上も人に見せなかつたんでガス。モウ來るゝ細を目茶苦茶に荒して困るから、そんなものは無エ無エと云つて見せなかつたんでガスけれども、アంతに去年約束しましたサカエニお見せ申すんでガス」と鉄の人は云つてゐた。この立穴にはもう一つ横穴が附屬してゐたのだが、出入に手間がとれるから止めた。

こゝにもあるのだが、といふ所には土が覆

「貝の化石がほしいなら、澤山貝の出る穴へ案内シミス」と云つて左手の谷へ行つた。然し其の穴は水が溜つてゐたので止めにした。碗貸さいふのを見た。昔の傳燈寺は後醍醐天皇の勅によつて創設せられて百石を賜つた北國有數の大御堂であつた、と鉄の人が説明する時分には人家が此の谷に無數あつたのだ相だ。その時分の人々の内來客の時など碗が足りない場合には、此の碗貸穴の口の所へ行つて、お碗を何十貸して下さい、といふて來ると其の口に、その要求された丈の碗が出てゐたものだ相だ。所がある時その碗を借りた者が返さなかつた。すると、その穴の神様が怒つたと見え、それ以來お碗を貸してくれないのだ相だ。「この穴は私共の子供の時からでもシツカリは入り見た事が無いんでガス」と云つて鉄でガチリ／＼と口の所を案内してくる人が掘つてゐた。肩中を泥だらけにしてやつと這入つた。玆は餘程角ばつてゐた。別にお碗も何もなかつた。

「立穴といふのは玆でガス」と云つて鉄をかついだま、指差す。成程墓場の穴のやうに、八九尺の穴がある。木の枝にアラ下つて落ち込んで見るさ左右に小さい穴があつた。とてしみにさつておく事にした。

X X

金澤の北方、行程一時間二十分の所に、こんな立派な穴居時代の遺物があるのに、どうして之を研究しようとする學者がゐないのであらう。又之を保存しようとするやうな特志家が何故現はれないのだ。坪井博士の發見された吉見の百穴よりなほ珍らしいものかも知れないのだ。近く河北瀨の西方には石器時代の多くの遺物が出るし、羽咋郡にも亦多數出た。この加賀、能登の地は太古は文明の中心であつたかも知れぬ。吾が北辰會々員諸君の内での古代の原人生活研究に興味を持つ人は獻身的にも研究せられたものだ。尙ほ研究の歩を進めて行つたならば、意外の地に意外の大發見をする事が出来るかも知れない。傳燈寺の穴居時代の遺跡は、先人未研究の地点ではない。人類學雜誌に一度發表された事があるらしい。が目下荒廢しつゝあつて、何等保存法などの講ぜられてない所を見るさ又土地の人が畑を荒されるのを嫌やがつて人

に知らせなかつた事實を考へる或はまた徹底的に研究はされてないかも知れぬ。

○三つしかない遠足部のスキも雪のある内は充分利用せられた。
○二學期にいつもやる兎狩は時機を失してたうたう出来なかつた。(ひろせ、こした)

講演部

第二學期に入りての本部の活動左の如し。

1 林先生講演會(二月二十三日)

一、あめりかの話 林並木先生

新歸朝の林先生は、米國についてその廣き見聞を、流暢なる舌にのせて、我等のために講演せらる、興味津々として盡さず、しかも學者としての先生の鋭敏なる批評眼を通したる觀察談なれば、我等の得るところまた多かりき。以前は講演會に出席して下さる先生は少なからず有りし模様なれど、近來はほとんどなく、我等寂寥の感に堪へず。どうぞ他の

先生方も我等の勧誘には枉げて應じて下されし。茲に林先生が我等のために有益なる講演をして下されしことを、謹みて感謝す。

2 例會(二月六日)

- 一、平和 中島 覺衛
 - 二、生活の不安 藤野 靖
 - 三、デモクラシーと宗教 金井 博
 - 四、人心の改造 高杉 孝次郎
 - 五、自我主張 加藤 一郎
 - 六、惡の宣傳 土手 守吉
 - 七、自己の眞相 尾崎 忠衛
- 他に奥田、古阪兩君の偶感あり。當日の辯論はいづれも雄辯揃ひにて、大いに聞きごたへありき。久しぶりの興奮を覺えて薄暮散會す。

3 第十北辰帝國議會(二月二十一日)

恒例帝國議會は二月二十一日午後一時を以て大いなる意氣込みのもとに開かれたり。當日議會に臨みたる内閣の組織左の如し。

- 首相兼法相 寺島 久松氏
- 内相兼遞相 松村 義一氏
- 外相 廣瀬 嘉一氏
- 軍相 土師 盛貞氏
- 農相兼藏相 半井 清氏

文相 戸村 定楠氏

議長 溝淵 進馬氏

副議長 上田 誠一

書記官長 竹村 重武

右黨(政府黨)

總裁 寺島 久松氏

副總裁 松村 義一氏

院內總務 土手 守吉

同 高杉 孝二郎

溝淵以下二百九十三名

中央黨(中立黨)

總裁 德永榮吉氏(欠席)

副總裁 竹井 廉氏

院內總務 藤野 靖

同 古阪 明詮

新谷以下二百二十三名

左黨(反對黨)

總裁 伊部 榮治氏

副總裁 藤原 保明氏

院內總務 上田 誠一

同 加藤 一郎

同 尾崎 忠衛

猪子以下二百六十一名

まづ議事日程は内閣總理大臣施政方針演説に始まり、次いで外務大臣の演説あり。それより質問に入る。尾崎上田藤野古阪加藤綿谷交々立ち上り、思想問題、國際聯盟などにつきて質問し、主務大臣よりそれぞれ答辯あり。次に議事日程第十三號に入る。

第一、兵役税法制定ニ關スル建議案

(中央黨提出)

主文 政府ハ速ニ兵役税法ヲ調査作製シ其ノ草案ヲ帝國議會ニ提出スベシ

理由 世界文明ノ伸暢ニ應ジ國力ノ振興ヲ圖ランガ爲メ連帶責任ノ觀念ニ基キ兵役税法ヲ定メ、以テ徵兵適齡ニ當リ陸海軍ノ現役ニ服セザル男子ヲシテ其ノ重大ナル負擔ノ一部ヲ分タシムルノ制ヲ布カシテ要スコレ本

案ヲ提出スルノ所以ナリ。
それに對して、金井古阪中島竹井の諸氏賛成演説をなし、寺島首相三田氏土師軍相之を駁論す。否決。

第二、米穀專賣法制定ニ關スル建議案

(左黨提出)

主文 政府ハ速ニ朝野ノ學識アル者ヲ以テ組織セル臨時調査機關ヲ設置シテ米

穀專賣法ヲ作製シ其ノ草案ヲ帝國議會ニ提出スベシ。

理由

米價ノ狂騰ハ需要者ノ生活ヲ不安ニシ、其ノ暴落ハ供給者ノ深憂ヲ來サシム、是レ實ニ帝國ノ一大痛心事ナリ。徒ラニ姑息ナル調節策ヲ弄シテ一時ヲ彌縫センカ、國民ノ思想上ニ於テ將來恐ルベキモノアラン、此際ヨロシク勇斷果決以テ民生安固ノ實ヲ擧ゲザルベカラズ、是レ本案ヲ提出スル所以ナリ。

愈々當日の大問題選舉法案に入る。

第三、選舉法中改正案(左黨提出)

一、選舉法第八條第三項ヲ削除スルコト
二、選舉法第十三條第一項ヲ削除スルコト
備考 選舉法第八條第三項——選舉人名簿調製ノ期日前滿一年以上土地租拾圓以上又ハ滿二年以上土地租以外ノ直接國稅拾圓以上若ハ地租、其他ノ直接國稅トナシテ拾圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者

選舉法第十三條第一項——神宮神職僧侶其他諸宗教師、小學教員ハ被選舉權ヲ有セズ其ノ之ヲ罷メタル後三ヶ月ヲ經過セザル者亦同シ

これに對し、林藤澤藤野伊部の諸氏熱心に賛成し、寺島首相松村法相栗田氏これに反對す。否決。
これにて當日の議事日程を終へ、六時閉會。別室にて茶話會を催し岡本部長の挨拶ありて散會せり。

議院雜記 △當日は非公開の方針を取りしにも係はらず、傍聴者續々入場し、開會前既に議員の盛況を呈し、入場し得ざるものは場外に山を築く勢妻じきばかりなり。議員數よりも却て傍聴者の數多きて、奇現象を呈したり。これ如何に現今民本の傾向の盛んなるかを示して頼母とき限なり。△當日の議會は例年に劣らず活氣を呈し、議員も傍聴者も熱して、渾然たる議會氣分に充ちたる雰囲気を作

りたり。拍手は勿論野次もまた盛にて、野次の中には奇聲利議嘆すべき天才的野次あり、また滑稽にして鹿瓜らしき大臣諸公の顔をさへ解きたるものあり。中には床を踏み鳴らして日比谷の悪い真似さへする者ありしも、こ

に知らせなかつた事實を考へるべき或ままだ敬

もむむも我等の功勞をこゝに示す

の日溝議長は極めて寛大にして、思ふまゝ我等の熱情を發揮せしめられしは、感謝に堪へざる處也。△今年採決は全く個人の自由意志に任ずることとしたり。こゝは甚だよきことなり。しかし諸君は三題とも否決せられたるを不思議に思ふならん。これは起立数の少きためなるが、これは無理もなし。何とせば、議員の肩書を有する人の中、ごちうでもよからうなどと腰を落ちつけてゐる人も多く(これが一番多し)中には起立するのが面倒臭いと思ふ者があつたゆゑ不精な議員も少くなし。また議場の不備より傍聴者と議員との區別明瞭ならざれば、いつも起立するものは少數なる也。これは是非賛成者を起立せしめ後に、更に反對者をも起立せしめ、その差を以て採決せざるべからず。このことは明年度より實行せられたく、議長並びに書記官長の御配慮を乞ふ。△質問戦は最も活氣ありたる様也。議員も大臣も傍聴者も一生懸命になりたり。尾崎總務が首相を攻撃し大向ふに向つて大見得を切りし時などは、破れんばかりの喝采を浴びたり。尾崎君得意の壇上なれば無理もなし。△質問に對する政府側の答辯に於いては半井農相最も鮮かなり。音聲小くまた山はなけれど、答辯

に微塵の危げなく、適切犀利見事に切破りて行くところ偉しといふべし。寺島首相の答辯はやゝ苦しく最初は人望を失ひたれど、その温健な人格を以て諄々と相手を論じてゆくところ矢張り人格の貫目なるべし。選挙法改正案に於いて普選に反對し、家長選挙權附與を説きし時などは満場を威服せしめたり。あの論は立派な論と今も感心せり。△民黨首領では藤原氏と伊部氏とが大出来也。藤原氏の米穀專賣反對演説は流石は専門家、その論は著しく具体的にて肯綮に當り、而もウィットに富む所容易に得べからざるの技倆なり。伊部氏は當日の花形役者、普選賛成につき言ふ所滔々數萬言、しかもその論旨は原稿に認めてあるため冗語なく、同一流の力と熱さを以て反對黨を完膚なきまでに、切り捲くる所痛快など言はん方なし。今後の擬國會には是非なくてはならぬ人なるべし。△我等生徒仲間では高杉君の米穀專賣賛成演説なるべし。よく調べよくまとまつてゐたり。△筆を擱くにあたり來賓諸氏が大童となりて、我等のために半日をさき與へられしことを感謝す。

(藤記)

注意

- 原稿は本會所定の用紙に認むべし
- 作品の種類は作者の自由たるべし
- 締切期日は嚴守すべし

大正八年三月二十四日印刷納本
大正八年三月三十日發行

第八拾四號

編輯兼發行者 石川縣金澤市早道町五十六番地 吉村政行

印刷者 石川縣金澤市穴水町二番丁廿九番地 生沼倍男

印刷所 石川縣金澤市高岡町九十番地 明治印刷株式會社

發行所 第四高等學校北辰會

【市に賣すら】

心經卷下 莊公作百四十四部 聖人十四卷